

---

# クローバー

ディライト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローバー

### 【Zコード】

Z6293Y

### 【作者名】

デイライト

### 【あらすじ】

ほぼ普通な高校生、草野春樹（高2）は、自分の大嫌いな栗色髪がきつかけで、学校一の「令嬢」であり美少女で、高嶺の花すぎて近寄りがたいと評判の碧原一葉（高2）と出会つ。しかしある時、春樹の小さい頃のトラウマと同じ境遇に遭つていた一葉を匿い、ひょんなことからその一葉の妹、一葉（小6）と三葉（小4）の碧原三姉妹と同居することに。ただ、一葉は噂とは違つて・・・。そんな4人と愉快なクラスメートと織り成す日常ホーム＆ラブコメディ。

初めまして。『デイライト』と申します。小説はど素人どじりか読むことをあまりないクセに、どうにもお話が書きたくなつてしまつた今日このごろ。ふと思い浮かんだこのお話を掲載したいと思います。遅筆、誤字脱字、言い回し等不快な点があるとは思いますが、感想、アドバイス等頂けると嬉しい限りです。どうぞよろしくおねがいします。

## クローバー

。。。。

深い海の奥底から呼び止めるよつた無機質な機械音。少し切ない夢を見ていたような気がするが、そんな物語は現実に引き戻されると同時にぐちゃぐちゃと形を失う。

「・・・・・また、面倒臭い日々が始まるよ」

余りの怠惰なていたらしく生活していたため、もはや久方ぶりに始まる新学期など面倒臭いを通り越して行く気なし。

俺は「あと10分だけ」という黄金句を布団にしまい込み、重力が3倍にも感じる重い身体を強引に引き起こす。

短針が7をさし、けたましく鳴り響く目覚まし時計を恨めしげに止めてやる。

窓を開け、締め切られて部屋内を今だに夜に保つていてる雨戸を半ば乱暴に開け放つと、ようやく部屋にも朝が訪れた。

朝からファイト一発な太陽光に眼が眩む。

・・・快晴だ。

これほどに爽やかな朝はなかなかないな。

そう思うと、先程までの眠気はどこへやら。

一つ大きく伸びをするとやけに機嫌も良くなつて、俺は颯爽と朝の決まつた身支度をし始める。

俺は草野春樹、今日から高校二年生。

もう既に俺の心情でわかつて頂けていると思うが、怠け者だ。

怠惰と言つ字がこれほどに当て嵌まるヤツはないんじゃないかといふくらいに、俺の自己評価はそれなのだ。しかも気分屋である。そんなどうとした質の悪い特徴を除けば、普通の高校生と言えな

くもない。

髪型は少しパー・マ掛かつたミニディアム系統。生れつきの赤っぽい栗色掛かつた髪質は、小さい頃から小馬鹿にされるし、教師にはちらついているやら不良だなんだなどと小煩く言われる、そんな自分の髪の毛は大嫌いだ。中背でこれといって他に特徴といえるものはない。そんな少しの嫌な特徴を除けば、普通の王道を地で行く俺には不良やらチャラ男など無縁極まりないイメージの筈なのだ。

しかしどうにも人という生き物は見た目で判断するようにできているらしい。

まあコンプレックスってやつだ。

自分の嫌な所のひとつやふたつ誰にだつてあるだろ？

さつさとブレザー制服に着替え終えて、俺は朝食の準備を始める。着替える前に食パンにバターを塗り、ハムを乗せてマヨネーズをかける。さらにチーズを重ねてオーブントースターで焼いておく。クロックムッシュというやつだ。その間に、フライパンで目玉焼きを作り、その焼いておいたクロックムッシュに乗せてやれば、時間のない朝食の強い味方クロックマダムの出来上がりだ。

「はふはふ・・・つづ~」

焼きたてを急いで頬張つて、若干上あごを火傷しながらそそくさと平らげた。牛乳を一気飲みして、腹が膨れれば次は洗い物だ。

この辺で大体気付いてもらえるだろうか？

全然急け者じやないじやないかと？

違う違う、俺が一人暮らしだつてことにさ。

母親は2年前、火事で他界。

親父とは・・・・・まあ色々あつて現在別居中。

ちなみにどちらも黒髪である。随分前に母子手帳を見せてもらつたことがあるので、養子だとか捨て子だとかそんな訳あり事情はない。親父の方はたぶん海外でバリバリ働いているのだろうが、詳しいことは知らない。繫がりといえば、俺を養うための生活費が俺の口座

に振り込まれるだけのドライな関係。

まあ別にあんなクソ親父のことなんてどうでもいいのさ。

向こうも俺のことなんて、毛ほどの感情も抱いちゃいないだろ？

俺はただ平穏にのほほんと暮らせりやそれでいい。

そう思つてたんだ。

歯磨きを済ませ、実験に失敗した化学者のような髪の毛をドライヤーを駆使して整える。部屋を見渡して戸締まり確認。ローファーで足を包み込んで準備完了、いつてきますだ。

二階建てボロアパートの、地上を繋ぐ二階またボロッちい鉄階段をカンカンと音をたてながら降りて行く。すると大家のおばちゃんがアパート前を箒で掃いている。

これもいつもの光景だ。

「おばちゃんおはよ」

俺は初日の出並に明るい笑顔をイメージして声をかけた。

「あらあらハルちゃんはやいのねえ）。・・・あ、そつかあ、もう新学期が始まる頃だつたわねえ～」

この通りふんわりとした口調で、見た目もとひんと湯けるような表情をするおばちゃんである。よく佃煮やにじいろがしをおすそ分けしてくれる、とても優しいお人だ。

母親が亡くなつた二年前から、ここに無理を言つて急に転がり込んだ俺を厄介者扱いしないで、とても良くしてくれたこのおばちゃんを俺は本当の母親のようであるように大好きなのだ。

「ふふ、新しいお友達ができるといいねえ～」

眼も口も弓なりにして、温かな笑顔を送ってくれた。もうそれだけでなんだか素晴らしい友達ができるような気がしてくるので不思議なものだ。

俺とおばちゃんはそれから一言一言他愛のない会話を繰り広げてから別れた。

「いつてらつしゃーい

若干の高台となっている所から、木々の間の下り道路を通りすべての麓にある県立花岡高等学校へと足を向ける。麓というほど高い山から下りてくるわけではないのだが、言い回しは間違つていらないだろう。歩いて10分の距離はあるが、木漏れ日の照らす綺麗な森林の中を通る通学というのは悪くない。

「うおーっす、ハルっちゃん！ 今日も元気に歩いてっか？」

ふと後ろから現れたのは一年時同級生、黒フレーム眼鏡に俺よりもさらに明るい金髪に近い茶髪、右耳にピアス、どでかいヘッドフォン、そして何故か年中身につけている長いマフラーをしたキャラ男オブザキャラ男、筑紫正志だ。俺より少し背が低いが、髪のトップをふわりと持ち上げているためにあまり変わりない。

蛍光灯のような笑顔を向けてくる筑紫は、乗ってきたスケートボートを器用に掬い上げると、俺の隣に肩を並べた。

「おう、お前は今日も元気に滑つてんな」

ハイテンションにローテンションでぶつけてやると、へへっと悪戯小僧の風情ではにかむ筑紫。

このキャラ男を極めたような男と普通のスペシャリストである俺が何故つるんでいるのか。それは俺の人生最大の謎であり、決して結託することのないハブとマングースが手を取り合つて生活を共にするくらいあるはずのない現象なわけだが・・・。何故だろうな。

でも友人なんてそんなもんだろう。

気が付けば なんてことは・・・まあよくはないか。

「おお二人とも。久しぶりだな。」

麓に降り立つ頃に合流したのは眞面目な風貌、トップも寝かせて飾り気のない黒髪無造作ヘア。見た目通りの学業優秀に見た目にそぐわないスポーツ万能。しかし整った顔立ち、優しげな表情、そして高身長のいわゆる才色兼備、イケてるメンズである佐久間<sup>さくまけいすけ</sup>恵介が清涼感抜群の笑顔を振り撒いてきた。

「お～す佐久間、お前も全然変わんねえな～」

出会うが早々筑紫がアホな事を吐かす。

春休み程度で友人の姿形が別人になつていたら、そいつの春休みをダイジエスト形式の紙芝居で見せて欲しいものだ。

「当たり前だ。なんたつて俺は普通な高校生であるからな」腰に手をあて、すんつと反り返りながら自信満々に言つ佐久間はやはりどこか抜けているちょっとびり惜しいヤツだ。

「「佐久間くん、おはよ～！」」

前を歩いていた女生徒一人組が佐久間に気付いて手を振つてくれる。それに応えるようにマイナスイオンでも出てるのではなかろうかといくくらいの笑顔で手を振り返す佐久間。

佐久間よ、普通の高校生は登校中に同級生でもない女生徒から「おはよ～！」なんて声を掛けられたりしないんだよ。一人で歩いているならまだしもここには俺と筑紫もいるのに。

「・・・余は面白くないぞよ、草野殿」

不愉快を絵に描いたような顔をこちらに向けてくる筑紫。

「世の中不公平じゃな、筑紫殿」

殿様口調の失敗作のように返してやると、筑紫は何かに納得したようには腕を組ながら深く頷いた。

「何が不公平なんだ？」

一人会話に加われなかつた佐久間が無垢な表情で聞いてくる。

これっぽっちの嫌みつたらしさがないのがまた問題だよな。

新学期初日、学校に着いてまずやることといえばクラス替えの張り出し掲示板を見に行くこと。今年一年の自分の立場が今日で全て決まるといつても過言ではない、所謂ターニングポイントだ。初対面入学時のクラス分けとは訳が違う、クラスのメンツによつては既にグループ分けが済ませてしまつ場合も大いにある。人気者ポジションに昇格する奴もいれば地味めポジションに格下げされる奴もいる。運が悪いと孤立する可能性も有り得る。大人が思つてゐるほど学校生活つてのは甘くない。

特に最初は鬪いなんだ。

俺も中学でのクラス替えを経験してきつてゐるからこそその考え方である。  
「あ～あ～、わんさか湧いてるの～」

筑紫が山の頂上から下を見下ろすようなポーズで人だかりを眺める。昇降口に入つてすぐの所に広いスペースがあり、お知らせなどは全てそこに備え付けてある掲示板に貼り出される。その掲示板の周りには来日したハリウッドスターを取り囲む記者団のように、自分の行く末を見定めようというブレザーフ服が占拠してゐた。歓喜の声をあげてゐる者やこの世の終わりなような顔で肩を落としている者も見て取れる。

「これは三人で見に行くのはちょっと無理だな」

佐久間が思案顔で顎をつまみながら言つ。

「んじや筑紫ちょっとスケボーでちやつちやと見てこいよ

俺がアホな提案をしてやると、不渝いな歯を見せながらグッズサインを出してスケボーに乗り、人垣へと蹴り出して行つた。学校内のスケボーは当然禁止であるし、漫画のようにならひの群れを飛び越えて行くなんてこともできるはずもない。筑紫はあえなく人混みの入

口で急停止し、結局スケボーから降りて自分の身体を強引に割り込ませながら消えていった。

前から思つてはいたが、やはりアホだったか筑紫。

とこうかスケボー忘れて行つてるぞ。

「…………春樹は今年目標とかあるのか？」

二人きりになつたと同時に企業面接官のような質問をぶつけてくる佐久間。

「唐突になんだ？ 相変わらず真面目なんだなあ」

「いや、今日は珍しい事に清々しい表情してるからさ」

いつも清々しくなくて悪かつたな。

もともとそういう顔なんだよ。

「別にそういうのじゃないけどさ、面倒臭がりの俺としては今日の寝起きが素晴らしい良かつたからじゃないか？」

「そうか。じゃあ何かいい事があるかもしれないな！」

いい事ね。

登校から不愉快極まりない挨拶イベントがあつたが言わないでおこう。

といふか何故お前が嬉しそうなんだよ。

理由を聞いて満足したのか、佐久間は腕を組みながら大きな使命に燃えているような表情で掲示板の方を眺めている。

「うお～い！ へ～へんだ～へんだ！」

佐久間と他愛のない話をしていると、江戸っ子が似合わない男ナンバーワンである筑紫が人混みの中から脱出してきた。

「どうだつたよ？」

「おう、俺らはまあ問題なく今年も同じクラスじゃ」

田舎の古い学校だから5クラスしかないとはい、腐れ縁という物はたいした効力だ。佐久間とは中学一年生の時、筑紫とは中学一年生で同じクラスになり、つるむようになつてからは全て同じクラスである。

佐久間と筑紫がハイタッチを交わしているのを眺めながら、しみじ

みと思つ。

こんな日常がずっと続けばいい。

新たな刺激なんていらないし、面倒なイベント事も必要ない。

現状維持が一番だつてな。

誰だつて現時点の状況が最高だと感じていれば、そう思つだり？  
だがしかし、こんな駄作（俺）を作り出しちまつた創造神とやらはどうやら大変（立腹だつたらしく・・・・、

「げつ」

いつの間にか佐久間と抱き合つていた筑紫が、俺の更に後方をゴキブリを発見してしまつたかのよつた表情で見定めた。俺も佐久間も釣られて振り向くと、そこに立つていたのは・・・・、

「どきなさい。掲示板が見えないじゃない」

弁慶も土下座物の仁王立ちで腰に手を当て、こえだめを見下ろすよくな表情で人混みに一声。掲示板に群がつていた生徒は、王様の椅子への道を開ける兵士のように端へと掃ける。道が開けたのを見て、彼女は群衆を平伏させる勢いで、その道の真ん中をずんずんと音が鳴りそなぐらいに堂々と歩いてくる。俺達も周りにならつて端に避ける。だんだんと近付いてくる彼女の周りには、お付きの人なのであらうか、うちの制服を着た女子一人がとことつて来る。

彼女を一言で言い表せば崇高。

上品で落ち着いていて、それでいて凜とした風情。とてもじゃないが気軽に話しつけていい雰囲気を纏つてはいるとは言い難い。女性の中でも小柄な方だが、それを感じさせないヒマラヤ山脈のように大きな自信に満ちた態度。くりつと真ん丸の水晶のよつた瞳と、それを護るような長い睫毛。淡いピンクで鈍く光る唇は色氣も加わらせ

る。神様がスペシャルオーダーメイドで作製されたのではないか。そんな馬鹿げた事を考えてしまつほどに、彼女は見る者総てを魅了させるのだ。

ただ、俺は彼女の気高く整つた容姿だけに魅了されたのではなかつた。

何故なら、彼女の柔らかく風鈴のように風に揺らされ、サラッと腰の辺りまで滝のように流れん長い髪の毛は、俺と同じ

栗色だつた。

子供の頃から馬鹿にされ、父親母親どちらも綺麗な黒髪であることで、遺伝など机上の空論ではないかと思つほどに苦惱したこの髪色。そんな嫌悪感一杯だつた栗色は、それが最初から彼女の色であったかのように綺麗なのだ。

まるで西洋人形に魂を宿らせたような、それが彼女の第一印象だつた。

「そりそりへんなのはなハルっちゃん、あの娘が同じクラスつてことだよ」

佐久間にくつついていた筈の筑紫は、いつの間にか俺の肩に腕を回し青汁を一気飲みしたような顔で彼女を見る。

「あの娘の事知つてるのか？」

「え！？逆にハルっちゃん知らんの？ちゃんと学校通つてたか！？」

失礼な、毎日一緒に登校してたろ。

「あの娘は碧原一葉。みどりはら いっよう 一体この田舎の何処にそびえ立つているんだ」という程の高級住宅に住んでいるみたいで、その正体はなんと大企業社長の御令嬢という噂だ。あの通りお付きの人らしき人物も側近にいるだろ？」

みたいとか噂とからしきとか全部推測じやねえか。

まあでもそれらしい雰囲気あるもんなあ。

何か住む世界が違つていつか。

「本当なんでこんな田舎学校にわざわざ通つてんのかね～。．．．社会勉強？」

「あの娘の事情はどうでもいいけど、なんであの娘と同じクラスなのがて～へんなんだ？」

「遠慮してしまうんだよ」

俺が筑紫に問うと、筑紫が答える前に佐久間が口を挟んできた。

「あの通りの性格だし、御令嬢心理も相俟つて、クラスの雰囲気が悪くなる。彼女は誰にも心を開かないし、歩み寄ろうとする者もない悪循環・・・」

いつもの爽やか顔は何処かに置いてしまったように、愁いを含んだ表情で碧原一葉を眺めている。

「・・・妙に物知り顔だなあ、佐久間」

様子のおかしい佐久間に筑紫が間の手を入れてやる。

するとまた普段の爽やか仮面を付けてにこやかに笑つた。

「聞いた話さ」

「ねえ」

思わず後ろにのけ反りそうになつた。

俺達が碧原一葉についてひそひそと話していると、彼女はいつの間にか俺達の前に立つていた。

香水の匂いだろうか。彼女が近付くとふわっと鼻をくすぐる香りが舞う。彼女は佐久間と筑紫を一瞥した後、俺を睨むように眺めてくる。なんとなく眼を合わせるのが気まずくなつて、左右に視線をさまわせると、佐久間も筑紫も絶滅動物を見たような表情を浮かべている。彼女が人に話しかけるのがそんなに珍しいのか、周囲もざわざわと俺達に注目しているようだ。

「・・・その髪の毛・・・・・・地毛なの？」

第一声に再び彼女の方に向き直ると、よくよく見てみれば彼女の視

線は俺の眼ではなくその上・・・・・俺のにつく栗毛に突き刺さっていた。

「・・・・え、ああ、地毛だよ。何もいじっちゃいない」

「へへ・・・・」

俺がそう答えると、彼女は関心したように綺麗な瞳を見開いた。

「わたし以外にもこんなに目立つ栗毛がいたなんてね」

彼女は少し笑顔を見せて、長い後ろ髪を翻しながらお付きを引き連れて掲示板へと去つていった。

「・・・・おいおい、驚天動地だぞ・・・・・・！」

先程からずっと俺の肩に腕を回している筑紫は驚きを隠せない様子で口を開く。

それよりもお前がそんな言葉を知つていた事に驚天動地だよ。

「どうやらお気に召されたようだな」

俺の肩にぽんつと手の平をあててくる佐久間。

だからなんで嬉しそうなんだよ。

今だざわづく野次馬に睨みを利かせながら、俺は大きく溜息をついた。

ただ、不思議と彼女から負のオーラは感じなかつた。

そう、これが俺、草野春樹と碧原一葉との出会いだった。

始業式、悠久の時のように感じられる校長の毎年毎年一言一句変わらない演説に耳を傾ける。ただでさえ憂鬱である上に、小一時間前の騒ぎのせいで俺の憂鬱指数はメーターが振り切れる程に上がりきつっていた。先程までの清々しさはどうやら底無し沼の奥深くに潜り込んでしまつたらしい。そりや急に後ろから背中を押されて底無し沼に投げ入れられたら這い上がれないのは当たり前である。朝方誰かがいい事が起きるとか言つていた気がするが、どうやら毎日がいい事だらけである奴の妄言であつたらしい。目立たず騒がず波風立てず生きていたというのに、よりもよつて大事なスタートダッシュで豪快に靴紐を踏ん付けてしまつとは。

この後のホームルームも絶対に注目されてしまつに違いないのだ。

始業式も終わり、体育館から次々に生徒が掃けて各々指定されたクラスへと足を向ける。

俺達は2 Dに振り分けられた。

この学校の校舎は3階建ての木造建築が西棟・東棟に分かれていて、所々寂れている辺りが趣ある古さを醸し出している。西棟が主に教室群であり、一階が最上級生の階で階段を多く上らなければならぬ三階は新入生の階だ。俺達は進級したので、今年からは真ん中二階に陣取る。これで階段の労力が少し減るから嬉しい限りだ。ちなみに東棟には理科室や調理室などの移動教室群がある。

「お～ここだここだ

俺達三人が教室に着くと、既にまばらに新たなクラスメイト達が集まっている。碧原一葉はまだ来ていないようだ。

しかしホッとするのも束の間、俺達が現れた途端、クラスメイトの視線は明らかに俺へと集まる。

「う・・・・・、やっぱり朝のアレが原因なのか・・・?」

いたたまれなくなつた俺は、視線を筑紫に移しながら助けを請つ。

「ウーン、あれば確かに衝撃だつたからなあ・・・」

そんな感心の言葉は求めてないんだよ。

「どうか春樹本当に碧原の事知らなかつたのか？」

今だに信じられないというような顔の佐久間。

なんだろうこの皆が知つてゐる芸能人を俺だけ知らないという疎外感にも似たこの気持ち・・・。

俺もしかして疎い？

「「疎い！」」

普段正反対な癖に二つ三つ時だけ息ぴつたりなんだこいつらは。

「ちよつとちよつとちよつとそこのお兄さんっ！」

皆の視線が痛い中、一人の女子が片手をひらひら近所のお喋り好きなおばさんのように俺達の方へと近付いてきた。

「ナニナニ？ヒトハと知り合いなのかい！？」

やけに滑舌が良くハイテンションな彼女は、肩ぐらいで伸ばした髪が全体的に外ハネ掛かっていて、前髪を可愛いらしい青い髪止めで抑えている。小顔で上脣が特徴的でどこか猫にも似た雰囲気を連想させる彼女は、『可愛い村娘』というのがしつくりくる。女子の中では平均的な身長という所だろうか。

「なんかなんか！朝来たら何やら大事件の雰囲気！つて感じでざわついてるから何かな～つて思つたら、ヒトハがなんと誰かさんとお話をつこいてるじゃんっ！しかも男のコ！ああヒトハ、アンタ高校デヴィイウーならぬ新学期デヴィイウー狙つていきなりの逆ナンかい！とかなんとか思つた訳ですよつーんでそこんとこどつなんですかいお兄さん！？」

マシンガントークでまくし立てる彼女の眼は爛々と輝いていて、まるで初めて好きな子が出来た息子に母親が興味津々で問い合わせる様である。

「・・・え、いや、髪の色が似てるねつて感じでちよつと声掛けら

れただけで、全くの初対面だよ」

「ありや、ホントだヒトハと髪色同じだ。染めてるのかい？」

彼女は人差し指を下唇に付けながらハテナマークを浮かべ、俺の髪をジーッと見つめる。

「いや地毛だよ。それよりその・・・碧原の友達なのか？」

「へえデゲ・・・珍しいね！ウン、そうだよつ！親友さ！わたしは枝村葵えだむらあおい！ヒトハとはもうかれこれ五年の付き合いなんだっ！」

にひひとピースサインを出しながら、太陽も眼が眩むほど笑顔を向けるくる。

「ヒトハもあんまし人付き合いが得意じゃないみたいでさ・・・。

そうつ！だからこそ今年はロケットダッシュをかましたといつてもいいんだよ！まさか新学期早々からねえ～」

俺はとすると、ロケットダッシュでこうかフライング一回やらかして失格になつた氣分です。

それにしても筑紫もかなりの電力を持っているが、この娘はその十倍は明るいな。

その大量の電力配給元の発電所をどこに隠し持つているんだ。少し分けてもらいたい。

「キミたちのお名前は？」

「あ、悪い遅れた。俺は草野春樹。んでさつきから俺に引っ付いてるのが筑紫正志、こっちのイケメンが佐久間恵介だ」

「よろしく葵ちゃん！」

「よろしくな枝村！」

いきなり馴れ馴れしい筑紫とイケメン否定しない佐久間プラス俺の紹介が終わるとちょうど予鈴が鳴り響いた。

「おつと！ホームルームが始まつちまつ～！んじや今年一年共に頑張ろ～！」

大きく手を振つて、枝村は軽いステップで自分の席へと帰つて行つた。

予鈴と同時にがたがたと椅子を引く音に混じつて、俺も自分の席へ

と着く。一番後ろの席のためクラス中を見渡せるのだが、枝村と話しこみでいるうちにいつの間にかまばらだったクラスメイトも全員が揃っていた。

と思いきや、中央のちょうど俺の列の一一番前が空席である。いないのはすぐに分かった。

同じクラスであるという碧原一葉だ。

一応顔見知りであることで存在の有無が判明した訳だが、まさか最初のホームルームに遅刻してくるなんてことは……。

「おっし！ 最初のホームルーム始めるぞー！」

遅刻ですね。

筋肉質な体育会系でノースリーブに下ジャージという体育の先生と言えばこれ！ ってほどに王道まつしげらな先生が、拡声器でも使っているのではないかといつくらいの響く声で教室に登場した。

どうやら今年の担任はこのお方らしい。体育で教わったことがないので、前年は違う学年を取り持っていたのだろう。

「今年 2 Dを担任することになった、岩崎黙夫だ！ 今年一年ビシバシ行くから覚悟しとけよー！」

えへへ～～～という生徒の批判も気にせず、岩崎教諭はさつさとホームルームを進める。初日のホームルームということで、やる事といえば各々の自己紹介くらいなもので、その日の学校は午前中で終わりを告げた。

ちなみに自己紹介では筑紫がいきなり笑いを取つてしたり、佐久間の自己紹介中には女子達の「今年大当たりだよね～！」といつ気に入らない声が聞こえたり、枝村が一人1分くらいで終わる簡単なものであるはずなのに、5分も早口で喋つていたりと、それはそれは大盛り上がりだったよ。

そして極めつけは、岩崎教諭がまさかの数学教師だったことだな。まあクラスとしては本当大当たりなんじゃないだろうか。

・・・ん、俺か？

勿論無難な受け答えで早々に「じゃあ、次の人～」でしたよ。

いいだらう平和だらう?

・・・まあ俺の事はいいんだ。

それよりも一つ・・・・・気掛かりだつたことがある。

その日、碧原一葉が自己紹介することはなかつた。

放課後、俺は家へ帰るなり学校指定の通学鞄を玄関先に放り投げると、アパートの敷地内に置いてある自転車を引っ張り出した。これから隣町まで片道30分掛けての買い出しだ。面倒臭がり怠け者である俺にとつちゃこれほどまでに苛酷な物はない筈なのだが、俺はこの買い出しが意外に結構好きなのだ。

慣れつてのは本当恐いものだな。

今日は学校も早く終わつたため、大変余裕を持つて行くことができるので吉である。通学路もある木々に囲まれる下り道路を、心地良く風を切りながら走り抜ける。車も殆ど通ることもないため、事故の心配はない。学校前を通り、さらに一つ林を越えると一軒家の住宅が増えてきて、だんだんと人通りも増えてくる。そんな住宅街をゆつたりとしたスピードで眺めるのもまた一興。ちなみに学校に自転車で行けばいいと思われる方もいるだろうが、家から遠い人は通学バスが手配されているため、自転車通学は禁則なのだ。何故かは校長にでも聞いてくれ。

そのまま行くとさらに賑やかになつてきて、もう普通の町並みである。ちよつと前までは商店街くらいしかなかつたが、今じやどでかいショッピングモールやカラオケやらボーリング場なんかもできて、だいぶ栄えてきた印象だ。

といつても俺が向かつているのはそんな大きいショッピングモール

ではなくて、行きつけの小さな『スーパー南田』である。正直言つて奮発する機会などない一人暮らしの食材調達など、小さいスーパーで充分なのだ。

「・・・っしゃいませ～」

店内に入ると買い物籠の整理をしているアルバイトのチャラいお姉さんが、それはもう無気力極まりない態度で慣用句を読み上げる。前はもっと愛想の良いスーパーだったのだが、最近アルバイトに教育が行き届いてない気がする。

ショッピングモールに客を取られつつあって店長ふて腐れてるのかな。

やる気のない店員に軽く一警くれてやつて、俺は持ってきた買い物袋を広げて獲物の探索を始めた。

そう、これもいつもの変わらない日常。

精巧に作られたゼンマイは、一つの取っ掛かりもなく回り続ける。急に別の事をやれと言われて、直ぐに適応できるほど器用でもない。いまあるそれを楽しめばそれでいいのだ。

材料調達も完了して、俺はあまりに空きすぎているレジに今にも破裂しそうに膨れ上がった買い物袋を置いた。

「いらっしゃいませ～！」

やけに威勢のいい声。新しいバイトさんだらうか？

そう思つてふと好印象で元気なアルバイトさんの顔を見ると、

「・・・・・・あ、あれ！？枝村？」

「・・・・・・げつ、草野くんじやあないか～い・・・・あはは・・・・

「

制服にエプロン姿で、悪戯がばれた子供のよつに口角をひくつかせる枝村がいた。

ていうかげつてなんですか、げつて。

・・・・つとそつか、そういえばうちの学校はアルバイト禁止だった

な。アルバイト禁止なのに一人暮らししてる奴がいるってのも変な話だが。

勿論学校には内緒だけど。

「ちょ・・・・・ちょっと外で待つてくれい！ ちょうど今バイト・・・いやお、お手伝いが終わるのでせつかくだから一緒に帰ろうじゃないかつ！？」というかもう正直に言おう、弁明させておくれい！」えらい焦りようで胸の前でばたばた手を振っている枝村。そんな姿はなるほど可愛いものであつたが、何やら俺の中で悪戯心が働いてしまつた。

「え、どうすっかなー」

腕を組んで若干流し目をしながら嘲笑うように見せてみる。

「あ～！ そんな事いう～！ んじゃ、この今日の夕飯らしき材料達はぼっしゅー！ レジうつてあげないよつ！」

「ちょ！ それだけは勘弁！」

いつの間にか攻守が交代していた。

外で待つこと5分。

一応ユニフォームである、ど太いマジックペンで『南田』と乱暴に書かれたエプロンを剥ぎ取った制服姿の枝村が、「うおーい」と手を振りながら走ってきた。

「そんな急がなくてもいいのに」

「いやいや～！ 人を待たせるところな事が起きないんだよつ！ つてどつかのお偉方のヒゲのおじいさんが言つてたよ」

「どこのじいさんだよ」

枝村は徒歩で、俺は先程通つてきた隣町とを結ぶ林を越えたちよつと先にあるという枝村の家まで自転車をひいて行くことにした。なんだろう・・・。

よくよく考えたらなんか異様に緊張してきたな。何か話題話題思い始めたらなんか異様に緊張してきたな。何か話題話題

「ねえつてば草野くん！」

「わあああ！ななななんだ！？」

後頭部辺りを軽いチョップで小突く枝村。一人緊張していたせいか、何度も呼ばれていた事に気付かなかつたらしい。

「どしたの？ボーッつとして？」

「いや、なんでも・・・」

どうやら気にしているのは俺だけのようで、様子がおかしい俺を枝村はきょとんと真ん丸で黒曜石のような瞳で眺めてくる。

「それよりさつきのバイトのことなんだけどさ・・・」

「あ、ああそれさつきも気になつてたんだけどさ、学校終わつてからまだ1時間くらいしか経つてないのにあがつちやつていいのか？学校は10時頃に終わり、現在11時半ちょっと前。1時間バイトなんて雇つてもらえるのだろうか？」

「いいのいいの！ホントアルバイトつていうよりお手伝い感覚なさ！店長が知り合いで、暇な時だけ来ていいよ～つて言われてるから、まあちょっとしたお小遣稼ぎだよ～！だから・・・」

そう続けて枝村はぱるつと弾けるような唇の前で人差し指を立てた。

「これは草野くん・・・いや春樹くん・・・だつけ？と私だけの約束だぞつ！」

「なぜにいきなり名前呼びに？」

「ふつふつふう。秘密を共有してしまつたらもう私たちは友達同士も同然！私も春樹・・・いやハルくんと呼ばづ！だから私の事も葵つて呼んでいいかんね～！」

へへつとはにかみ嬉しそうに持つている通学鞄を蹴飛ばす。木々の隙間から差し込む光も相俟つて、彼女の笑顔は宝石のように輝いていた。そんなことを面と向かつて言われるのは初めてで少し恥ずかしい。

「おおつとーどつやうじこーでお別れなようだつ！そんじやねハルくん！また明日ガツコで会おう～！」

やいやい話を交わしていくうちに、林を抜けて十字路に着く。島に

て遭難中の冒険家が、一隻の船を見つけて助けを求める時のように大きく手を振つて見せる枝村だが、

「そろそろハルくんの秘密もちゃんと共有してるからねっ！」

一瞬何の事かわからなかつたが、枝村はすぐに俺の買い物袋を指さした。

「その材料の量・・・一人暮らしだろう？いやつ！いいんだ！事情は言わないでくれい！私も詮索したりはしないよ！だつて人には、「どこぞの演劇女優みたいに身振り手振りで感情を表現する枝村だつたが、途中で言葉を切つて、

「・・・それぞれ言えないものがあるものだから」

元気印の彼女からは想像できないほど憂いのある表情を一瞬だけ見せたが、すぐに真っ白で綺麗に整つた歯を見せて笑顔で手を振つた。スカートを揺らし走り去つて行く彼女を眺めながら、俺は一つ心残りを呟いた。

「・・・葵つて呼べなかつたなあ」

帰り道、行きは心地良い下り坂も帰りは地獄の上り坂に早変わり。俺は鎧だらけで漕ぐことにギシギシと悲鳴をあげているマイバイシコーと共に、足に乳酸を溜めながら必死にしかしちょととずつ上がって行く。自転車から降りて押して登ればいいと思われるかもしれないが、やつてみるとわかるが疲れ具合はどつちも変わらない。足か腕かの違いだ。

どうせ疲れるなら君も一緒に悲鳴をあげようじゃないか我が相棒チャリくん。もし自転車が気持ちを表現できるなら、振り落とされてタイヤで頬を踏み潰されても文句はいえまい。もう30年後くらいには、坂道では歩道がエスカレーターになつていると嬉しいのだが。そんな馬鹿げた事を考へている頃に、ようやく坂道を登り終える。足もチャリも悲鳴をあげている。

その時だつた。

麓の方から聞こえ出す悲鳴にもとれる音。

俺のトラウマをえぐるベルと警報。

消防車だ。

2、3台の警告音が混ざり合って、事の重大さが知れる。  
得体の知れない物が胸の中でざわつく。

二年前の走馬灯が頭の中を高速で駆け巡る。

『逃げて・・・春樹・・・早く・・・！』

「この音・・・・さつき枝村と分かれた近くじゃ・・・・。  
？」

自分の心音が低音ドラムのように聞こえる。

肺を失つたのではないかと感じるほど呼吸が難しい。

坂を登りきった汗も今では冷え切つて頬を伝う。

「・・・・・・行かなきや」

それでも俺の身体は勝手に自転車に跨がつて、再び坂道を急降下している。

思う程大きな騒ぎではないのかも知れない。

知り合いが被害に遭うなど微生物ほどの確率である。

ただ火事に関しては、俺の中ではもう知り合いだらうがなからうが駆け付けなければ気が済まないものであった。

何より『あの時』と同じ、胸騒ぎが止まらなかつた。

もうあの時と同じ過ちを繰り返しはしない。

俺はもう逃げない。

逃げたくない。

無我夢中でペダルを漕いで、警告音が鳴る方へ向かう。音との距離を詰めるごとに、だんだんと野次馬の声が聞こえてくる。更には周りの温度も上がっているように感じる。先程枝村と分かれた林前十字路に着き、音の鳴る方へ耳を澄ますと、どうやら枝村の家とは逆

方向らしい。

「とりあえずは良かつた・・・」

一息ついて、ワイシャツの袖で吹き出す汗を拭う。だがふと上を見ると、ここからでも確認できるほどの黒煙があがつていて、事態の大きさを表している。

「あ、あの！すいません！この先で何か遭つたんですか！？」

黒煙がなびく方から走つてきた主婦らしきおばさんに声を掛ける。「大火事よお！随分古いアパートで人もあまり住んでなかつたらしいんだけど、最近この辺りで放火事件が多発してたからねえ・・・つてちよつと！危ないよそつちは！」

お礼を述べるのも忘れて、更に自転車を走らせる。放火と聞いて苛立ちもある。しかしそんなことよりも人命救助が専決。いや、漫画のように素人が水を被つて業火に飛び込み、救出できるなぞ考えちゃいない。

それでも、ほんの些細な事でもいい。俺にも何かできることはないか。

そう思いながら着いた現場では、既に火は弱つていて消火活動も終盤であった。多くの野次馬で消防士の姿を確認することができないが、掛け声だけは届いてくる。火は弱まつてはいるが、人の多さもあつてか熱気が凄まじい。

まるでサウナにいるようだ。

「すいません！中の人、助かつたんですか！？」

再び人混みの中にいる人へ事情聴取。

「うーん、助かつたんだけどね・・・。可哀相に、高校生くらいの女の子と妹らしき子たちはまだ小学生ぐらいだよ・・・。」

ほら見てみなつと前を開けてくれると、俺の目に飛び込んできた光景は、いくつかの頑丈な柱だけが煤けたまま立つているだけの跡形もないアパートの無惨な姿。

そして 、

身体中に灰を張り付け、同じく顔をくしゃくしゃにして大泣きしている小学生くらいの女の子一人を両脇に連れ、世界の終わりを知ってしまったかのように無気力で立ち尽くしている・・・・・

碧原一葉、その人であった。

その姿は、さながら國を失つた王女であるように、ただただ真つ直ぐ陥落した城を見つめていた。

## 第1章 (2)

黒煙と喧騒の狭間に立ち尽くす三つの影。

「碧・・・原・・・？」

消防士たちの制止する声も無視して、立ち尽くす彼女に俺は思わず声を掛けた。名前を教え合つたわけでもないのに、何故知つてるんだと怪しまれるかもしれない。

しかしそんな事は杞憂に終わる。

彼女はこちらを向かずに、ただひたすら切なげに燃え尽きて廃れた柱を見つめながら、

「燃えちゃった・・・。全部・・・なにもかも・・・」

そう呟いた。

微かな風が彼女の長い髪を揺らす。俺の声にも存在にも気付いているのかは知れなかつたが、彼女は一粒の涙も見せていない。

『あの日』の残像が彼女と重なる。

そう・・・あの時あそこに立つていたのは俺だ。そして茫然自失の俺に手を差し延べてくれたのは大家のおばちゃんだった。

「大丈夫だよ」・・・。大丈夫・・・

それはまるで天使のような笑顔で、傷心の俺を抱きしめておばちゃんは俺をアパートに連れて帰つて、温かいスープをくれた。あの時俺の心は、曇天にも似た黒い靄が身体の外に放出されていくような感覚を覚えたんだ。

だから俺は、知らず知らずのうちに彼女達の前に立ち、あの日のおばちゃんにあやかるように手を差し延べていた。

「・・・あ、あなた・・・」

やはり俺の存在には気付いていなかつたようで、長い睫毛から覗く今にもこぼれ落ちそうな瞳がようやく俺の方へと照準を合わせた。

彼女の両脇に連れられている妹達も真っ赤で泣き腫らした瞳でこちらを見つめてくる。

何と声をかける？

俺はまだこんな時にとる行動をまだ経験値として獲得していない。何故なら俺はなんてことのない子供だからだ。

抱きしめて安心させる力も、気の利いた言葉で落ち着かせてあげることも、てんて自信なんてない。

というか抱きしめるのは流石に色々な面で無理がある。

それでも俺は言うしかないんだ。

「 ウ、ウチくるか・・・？ 着替えるモンくらーならあるし・・・」

「・

まだ太陽が赤くなるには早い頃、俺と碧原一葉とその妹一人は、我が根城であるボロアパートへと向かっていた。自転車なら20分くらいの距離であるが、四人乗りなど以つての外のため、歩いて倍の時間が掛かる。

道中、彼女達とは一言も口を利かなかつた。何故ついて来てくれるのか、俺も自分で言つておいてなんだがさつぱりわからない。

そもそも俺は保護者になれる歳でもないし、碧原一葉に至つては同級生である。今更ながら非常識すぎるのはないか、両親だつて心配してるだろう、そもそもほぼ初対面だし、などなどきつい坂道を歩きながら頭を悩ませていた。

しかし、彼女達は俯きながらも俺の後ろをカルガモの子のようについて来てくれる。両脇の妹達ももう泣いてはいない。二人とも小学生くらいだと思われるが、この歳での火事被害はトラウマになりかない。お前なんかに何ができると言わればそれまでであるが、

せめて今日の事を忘れさせてあげるぐらにお持て成ししてあげよう  
と思う。

俺がそうされたよう。

「ゴメン、えらい狭いとこだけど・・・」

部屋に着き、先ずは風呂に入れてやることにする。彼女達の身なり  
は黒ずんでいて、着ている衣服も所々煤けてボロボロだ。

「とりあえず俺のTシャツとジャージ・・・妹さん達には結構でかいかもしないけど、いいか？」

俺が問うと、彼女はコクリと首を縦に振り、俺から衣服を受け取る  
と妹達と共に風呂場へ消えていった。

一段落ついて、俺は畳に腰掛ける。そついえばずっと制服のままで  
あつたが、そんのはもうどうでも良かつた。

色々気になることがある。

彼女達の着ていた服装だ。

筑紫や佐久間の話からしても高貴な家柄であることは間違いないはずなんだが・・・。

彼女達は学校のジャージ姿だった。それに燃えてしまつたというのもここ同様のボロアパートであり、彼女とは似ても似つかない。まさか、ドが付くほどの貧乏だなんてことは・・・。

そんな有り得もしない想像をしていると、風呂場のほうから微かな笑い声が漏れてきた。そんな音に聞き耳を立てながら、俺はようやく安堵した。

自分同様の体験で悲しむ姿は誰であろうと見たくなり。

火事の喪失感というものは、人には説明できないほど苦く切ないものなのだ。

しばらく茶菓子の用意などで動いた後、俺は制服を脱ぎ捨てて部屋着へと変身する。Tシャツにスウェットというなんともラフな格好である。

ちなみに着替え中に彼女達が風呂からあがつてくるなんてお約束は

なかつたので安心してくれ。女の子の風呂は長く、茶菓子用意や着替え程度の時間では帰つて来なかつた。三人であるから特に長く、もうかれこれ1時間半近く入つてゐる。

もう夕方だ。窓から差し込む紅い光は、座つてゐる俺をスポットライトのように照らす。部屋に漏れ込むカラスの鳴き声が哀愁を漂わせ、今日の終わりを告げてゐるようだ。

「あの・・・」

身体を窓に向けていた俺に、どこか遠慮を感じる声がかかる。振り向くと、風呂上がりで微かに湯気を漂わせ、水氣を含んだ髪を妖艶に揺らしながら碧原一葉がこちらへやって來た。妹達も後から横断歩道を一列で渡る小学生のようについて來る。碧原は俺の少し大きい学校のジャージをだぶつかせ、ズボンの裾を引きずらせる。先程までの格好もジャージだったが、彼女の容姿には不相応の衣服である。それでも、水を滴らせ、近づくごとに鼻をくすぐらせる石鹼の香りに思わず口をあんぐりと開けてしまいそうだ。

いつも俺の使つてゐるボディーソープのはずなのに、妙に氣になるのはなぜだろうな。

「一葉と二葉には大きすぎてズボンは無理だったから・・・」

一葉・二葉とは妹達のことだろう。碧原は先程渡した一着のズボンを返してきた。妹達は俺のプリントTシャツを着てゐるが、あまりに大きすぎて膝上まで伸びるワンピースのようになつてしまつてゐる。

「ああ、ごめん。必要なら買つてくれるけど・・・」

「う、ううん！そこまでは大丈夫だから！」

慌てた仕種で胸の前でふるふると手をばたつかせる碧原。

「だいじょーぶです！ありがとーござりますっ！」

そんな姉の様子を見て、少しふわふわとしたショートカットの方の妹が快活に答え、ぺこりと可愛いらしくお辞儀をしてくれる。

「ほらっ！ミツバもおれーいうの！」

「一葉と呼ばれる娘は舌足らずな口調で、頬を膨らませて若干紅潮させながら黙つていた長いボニー・テールを右肩に掛けておさげのようにしているもう一人の妹の背中を押してお礼を促す。

「う・・・・・あ、ありがと・・・」

目元に下がる綺麗に切り揃えられた前髪の影からつぶらな瞳が俺を見つめ、耳を澄まさないと聞こえないほどの声量で多少むくれながらお礼を述べてくれた。

無気力な表情に定評のある俺の、世にも珍しい最大級の笑顔を返してあげると、またすぐにぷいっとそっぽを向いてしまう。

「「めんね、ミツバはちょっと人見知りするから・・・」

「ぜんぜん。それより今更過ぎるけど、俺は草野春樹っていうんだ。」

「朝話はしたけど名前は言つてなかつたわね。私は碧原一葉。こつちのショートカットが一葉小学六年生で、おさげが三葉、四年生。三人姉妹なの」

碧原が妹達の頭に優しく掌を乗せると、一人はくすぐつたそうに眼を細める。

髪色も碧原、そして俺と同じように栗色だ。

顔も三姉妹そつくりで、なんといっても三人とも端整な顔のつくりである。

こんな反則的な三姉妹がいてもいいのだろうか。

「来ていいって言つてくれたけど、よく考えたら非常識だよね・・・。名前も知らなかつた同級生の所に来るなんて・・・」

「き、気にすんなよ！もとはといえば俺が声掛けたんだし！」

憂いを帯びた表情を浮かべる碧原に俺は慌てて返答する。

うう、一番俺が逡巡していたことを・・・。

それにして、だいぶ聞いていたイメージとは違つ気がする。朝感じた人を寄せ付けない空氣、御令嬢のような気品溢れる様子は今は消え去っている。

「ま、まあとりあえず座んなよ。ソファーとかないけど・・・」

俺は先程茶菓子を出したと同時に敷いた人数分の座布団を指す。

「う、うんありがと・・・。ソファーって？」

「えー? あ、いやこっちの話・・・」

「うつ、まさか御令嬢を座布団なんかに座らせるはめになるとは・・・。

和室の中心に置いてある木製正方形テーブルを挟んで、三人は俺の向かいへと腰掛ける。冬は火燐にもなる便利な物だ。それにしても何か妙に座布団が似合っているのは気のせいだろうか。

「わあおせんべー！」

一葉ちゃんがテーブルに身を乗り出して汚れのない瞳を輝かせながら、海苔付き煎餅をさつさと一枚取つて頬張る。

「」おらフタバ！ 図々しいにもほどがあるでしょ！？

「いーじょん！ せつかくハルキくんがだしてくれたんだもん！ 食べなきやわるいじょん！」

「だからつていきなりがつづくな！」

おやつの時間を守れなかつた子供を叱り付けるよつこ、碧原は一葉ちゃんの脳天にげんこつを落とす。

「いつつたあ～～～！！ヒトハのばか！」

漫画ならこぶが盛り上がつているであろう箇所を押さえながら、涙目で姉を指差す。

「ふふ・・・。フタバは食いしん坊だから・・・」

お上品に口許を手で押さえながら嘲笑する一葉ちゃん。

「う、うるせーーー！ ミツバもばか！ ばかばか！」

「あにおーーー！」

クールに見える一葉ちゃんがクールを何処かに置き忘れて立ち上がるのを皮切りに、ぽかぽかと殴り合い・・・というか小突き合いが始まつた。

「まつたくもー、あいつらは・・・」

「はは、ちょっとでも元気になつてくれて良かつたよ」

呆れて嘆息する碧原の表情も、少し穏やかに戻つた気がする。

「・・・草野くん」

「春樹でいいよ」

「ん、じゃあハルキ・・・くんは・・・、なんで私達を・・・？」

少し俯きながら上目遣いで碧原。

「・・・俺もさ、一年前に火事で母親亡くしてさ、それでほつとけなかつたつていうのが理由だよ」

「・・・え、じゃあ今は」

「一人暮らしだよ。親父は海外にいるし」

「・・・そつか。でも・・・学校での私の事、大体知ってるでしょ？何で言われてるか・・・とか」

さらに俯いて表情は見えなくなり、覗くのはぎゅっと下唇を噛み締める口元だけ。心なしか震えているように見える。

「まあ知らないって言つたら嘘になるかな」

今日の朝にその噂を聞いた疎い奴なんですが。

「・・・私もさ、ミツバとおんなじですんごい人見知りしちゃって、毎回クラスに馴染めなくてさ・・・。そのうちなんかお金持ちだとかお高く止まつてるとか有り得もしない噂が立っちゃって・・・。誤解も解けないまま私もそういう風に振る舞はしかなくて・・・」

「」

「・・・やっぱ御令嬢とかはうわはぱちか」

「・・・気づいてたの？」

そりやあな。

ボロアパートが燃えるのを学校のジャージ姿で眺めている姿を目撃したら、疑念も働くというものだ。

「・・・よしわかった。そんな噂なくしてやろうぜー」

俺は胸の前でガツツポーズを見せてやる。何故こんな気持ちになるのかは自分自身にもわからない。いつでも面倒だとこな係わり合いつことに消極的なのに。

「・・・え？」

碧原はその言葉に助けを請うような表情で俺の方へと顔をあげる。

「せっかくクラスメイトになつて、ひょんな事から俺とも話すよくなつただろ？俺が頻繁におまえと話してればそんな噂はすぐ無くなるさ」

「えうかな……？「う、うん……そ、そだね！じゃあこれから……よ、よろしくおねがいします……」

ペコリとお辞儀をする碧原。顔をあげた時、彼女の表情はこれまでのどのシーンよりも輝く、向田葵もそっぽを向くほどの笑顔を向けてくれた。

あまりの眩しさと恥ずかしさから、

「え、あ、い、いちらこやろしくおねがいします……」

何故か俺まで頭を下げてしまつて、何やらお見合いのようになつてしまつた。折角の天使の微笑みから一瞬で眼を逸らしてしまつた俺の間抜けさを誰が攻められよ。直射日光を鏡で反射させて目の前で当てられてる気分だ。

思わず眼も逸らしてしまつ。

「まあそれはそれとて、住むとかどうするんだ？」

俺の場合はおばちゃんが連れ帰つてくれて助かつたが、普通住むところがなくなつちまつたらほとほと困り果てることだらう。親戚に連絡したりなどしなければならないだらうじ。

しかしあれこれ俺の家に来て2時間以上が経つ。それでも、彼女は親や親戚に連絡する様子がなく、俺の問いに躊躇つてゐる。

「フタバもミツバもいるからすぐにでも決めたいんだけど……」  
そういうて二人に目を向けると、今だ可愛いらしの罵声を浴びせあつてゐる。

人のお家の事情を聞くなど野暮なことはしない。それぞれ色々な境遇があるだらうじ、出会つたばっかの俺が軽々しく聞いていい問題ではないのだ。

「ただ俺には一つ考えがあつた。

「ここに住むか？」

胡乱に肯定しかけて碧原は急に頬を真っ赤に染め、口を開けたり閉じたり異常なほどうろたえている。

娘も何を 稲かち また高橋生がし その  
出会つたばかりで・・・・・・・・・・・・・・ 同棲・・・・・・・・・・・・・・ なんて・・

「ちょ！アホか！俺の部屋にじやねえ！ーーーのアパートでつてことだ！つてか同棲で！」

なんて勘違いしやがる！そりやせよこと言葉足らすてにはあつたか  
どえらい勘違いをする碧原もかなり抜けているのかも知れない。  
俺の知人になる奴は本当みんなアホが多い。

え？ あ、このアパート？

「そう、俺も火事で家失った時に、大家のおばちゃんが迎え入れてくれたんだ。頼み込めば必ず受け入れてくれるはずだ」

「よーじじやあ早速相談いってみつか！」

「え！？空きがない！？」

もう太陽も仕事を終え、地平線の向こうへ帰宅の一途を辿っている頃。

俺と碧原三姉妹は、食欲をそそられる香りが漂つてゐる一階大家の  
おばちゃん宅（一般入居者より少々間取りがでかい）へと足を運んでいた。玄関先での立ち話であるが、夕飯の香りが漏れ出ている。  
この匂いは肉じゃがだな。今日もおすそ分け貰えないかな・・・つ  
てそうじやなくて！

「事情はわかつたけど・・・、もう入居者で一杯あげられる部屋がもうないんだあ・・・」

おばちゃんは心底残念そう

「そこをなんとかできないかな？・・・ああ、おば

とか・・・つてそか雄太もいるもんね・・・

雄太（13）とは、ばらちゃんの一人息子である。近くの中学校に通つてい、るカノガ井。まあ、そのうち爺爺（じいじ）もああだ、い。

会いたくないけど。

「うん、悪いんだけど、うちも雄太だけで精一杯だから……。  
・そうだ！！」

頭の上で電球を光らせたように、おばちゃんは左の掌に右拳を落としてやる。それから人差し指をピンと一本立てて・・・、

何かしら考えか!?

「ハルちゃん家で一緒に住めはいしんだよ」

ああああああ！？

おばあちゃんの語尾に音符マークが付くのではなかろうかといつほど

香織にはほんとんどもなし繩を挑戦していく

とんでも発言に碧原も動搖を隠せていない。というか先程の自分の勘違いが現実になりそうになつてているのだから当たり前か。

「大丈夫だよ。ハルちゃんはしきりしてるし、部屋の家賃とかはハルちゃんのところは免除にしてあるし、ちょっと狭いけど一応部屋割は二部屋になつてるから~」

しつかりしてゐるからってだけで高校生の男女を一つ屋根の下で住む事を認めてくれるほど社会は甘くないよ！おばちゃんの大丈夫発言とその笑顔は人を安心させる力を持つてゐるのは確かであるが、今回ばかりは全く大丈夫な気がしない。

まあ使つていな部屋が一つあるのも確かだし、家賃とかも働くようになるまでは～と気を利かせてくれてゐるし、年頃の女の子と同

室だからって簡単に発情するようなザル理性な俺ではないだ。信じていろざ俺）。（はず

「ナニナニー！？ ハルキンくんと一緒に暮らせるのー？ やつたー！」  
大人の事情をわかっていない一葉ちゃんがウサギのように飛びはね  
ながら万歳万歳。

三葉ちゃんが明後日の方向を向きながらボソリと一言。「…………うん…………私もあそ」「は、心地いい…………」

「ほりほりあ～、妹さん達もいづらひてねじだし～。ね？」

シュークリームのように甘いふわふわ笑顔でおばちゃん。ちょ、おばちゃん今日は天使といつか悪魔の囁きに聞こえるんですけど！やばい、完全にペースを握られた！天使の皮を被つた悪魔と無垢でまんまと悪魔に騙された天使の見習トリオには太刀打ちができない。残りは分別ある天使だが、

「あ・・、じゃあ次のト「が決まるまではお言葉に甘えて・・・。

・・・悪に陥ちた。

「隣の和室部屋が一つ余ってるから、三人はそっちが主の部屋な夕飯タイム。」

毎度一人であつた食事も今日は賑やかに四人だ。おそそ分けしても  
らつたいつもより多い肉じゃがを突き合いながら、今後についての  
話をする。

・  
・  
「  
ホントはこめんね  
こんな強引は押しかけたみたいにな  
せやで・

フォークとナイフが似合うはずだった碧原が、箸と茶碗を持ちながら、飯に眼を落としながら呟く。

「おう、それだそれ！」

俺はここぞとばかりに、『飯粒の付いた箸で碧原を指す。

「いつなつちまつた事はもう氣にしてない！だからもうお互い氣を遣い合うのはやめよう。俺はお前らを家族だと認識する。だから苗字で呼んだりしないし、妹達にちゃんと付けなんかもしない」

何故か立ち上がって演説する俺を下からぽかんと見上げる碧原三姉妹。

「だからお前らも素の自分でいろ！存分にくつろいで貰つて構わないし、なんか生活上文句があつたら遠慮なく言つてくれ。俺の事はなんて呼んでもいい。・・・これがこれからウチで暮らす上で今この瞬間作られたルールだ。・・・いいか？」

同じ家で暮らす上で氣を遣うほど疲れるものはないと思う。共同生活するというなら、それぐらいのフランクさがないとやつていけない。

三人は眼を点にしながら、しばし固まつた後、

「　　つふ・・・、あはははは！」

一斉に堪えられなくなつたように笑い転げた。

「あれ！？お、おい・・・だ、大丈夫か？変なこと言つたか、俺？」  
何か急に恥ずかしくなつてきた。ていうか飯中立ち上がつてまで言う事じやなかつた？

うわ、もしかしてクサイ？

クサすぎる発言だった？

そんなことを頭を抱えながら苦惱していると、笑い転げる三人からすぐに一人が回復。

身体を起こしてから、

「あはは・・・わかつたよハルキ」

涙目の眼を擦りながらにかむ一葉の表情は、一点の曇りも露もない澄み渡る青空のようだった。

こうして、俺と碧原三姉妹の奇妙な共同生活が始まった。

完

「ホットドックだあ！！」

翌日、いつも通り無気力な朝を迎える。毎度お馴染み朝の身支度が始まるわけだが、本日からは一味違う。地球の公転周期のように変わらなかつた日常を崩す、いわば閏年のような存在が、俺の日常に追加されたからだ。細長いパンを真ん中で谷を作つてあげて、キャベツや玉ねぎやらを敷いてウインナーを乗つけただけの、時間のない朝の心強いメニューを四人分の皿に盛り合わせていると、朝もはよから快活な声でメニューの名を叫ぶ娘がやってきた。

「へえー！ 食べたことないよ！ 早く食べたい！」

様々な方向からまじまじとホットドックを眺めているのは、碧原家次女一葉、小学6年生。

寝癖であちこち跳ねた栗色ショートカットを揺らし、好奇心旺盛の輝く無垢な瞳は一片の曇りも見当たらない。俺の貸したTシャツが大きすぎて、ほとんどワンピースのように着こなしてゐる。

といふかホットドック食つたことないつて、今まで何食つてきただ？

「一葉、フタバ！ いただきますしてからでしょ！」

既に我慢しきれず、一葉がホットドックを小さな口に運ぼうとしているのを叩撃したのは、碧原家長女一葉、俺の同級生。

一つの枝毛も見当たらないような腰辺りまで流れる栗色の髪の毛。一重によつてはつきり主張をするくりつとした眼。綺麗な放物線を描く整つた鼻に自然な口角のあがりがさらに美しさを増させる。決して細面とは言えない輪郭は、幼さも垣間見せて、まるで西洋人形を連想させる、完璧な美人だ。

しかし今の服装はといえば、俺が貸してあげている飾り気皆無の学校の赤ジャージ上下。学校ではすっかり令嬢・高飛車キャラが成り立つてしまつてゐるが、学校のやつらが見たらどう思うんだろうな。

「朝からヒトハ「うるさいー！いいじゃんハルキが作ってくれたんだから！」

「だからこそそのいただきますでしょー。」めんねハルキ、せっかく昨日分担表作ったのに・・・」

そう、昨日作った生活分担表によれば今日の朝飯は一葉+妹達のはずだったのだが、いざ起きてみると誰もおらず、結局俺が急いで仕度するはめになつたのだ。

「朝弱いなら言えよ・・・。つてか時間ないからはよ食え」目に見えるほど口を尖らして落ち込む一葉に、時計を指しながら促す。

「・・・・・・・・・・はよ・・・」

田を「じご」し夢うつつの表情で、全員の耳に届くぎりぎりの声量であいさつをしながら座布団に正座してきたのは、碧原家三女三葉、小学四年生。

天真爛漫な一葉とは逆に大人びた印象。四年生にして既に人生を悟ったような、クールであまり感情を表に出さない奴だ。いつもは栗色の長い髪をポニー・テールに束ねて右肩おさげにしているが、今は寝起きで一葉とほぼ同じ髪型。

妹達も一葉同様、端整な顔立ちをしていて、三人が食卓に並ぶとお人形とのおままごと遊びをしている感覚に陥る。

三葉は普段の眠そうな眼をさらに細めて、ホットドック一点を見つめながら固まっている。

「おうミツバ、よく寝れたか？」

聞いているのか怪しかつたが、俺が問うと5秒くらいの間の後、ひとつゆつくりと頷いた。

「へへーミツバは寝言でよくソフトクリームおいひーつて叫んでるんだよー」

「言つてないし何適当言つてんだ！アホフタバ！」

一葉が茶々を入れるのを皮切りに三葉がチョップを食らわす。

「イデーーー！」

大人びて いると言つたが、まだまだ年相応の可愛いらしさも残している。

「つし！みんな揃つたし、食うか！」

『いただきまーす！』

火事によつて家を失つた碧原三姉妹。

まさか一緒に住むなんてことになる夢にも思わなかつたが、一先ず新たな生活がスタートしたようだ。変わるわけないと思っていたし、変わつてほしくないと思っていた日常。こうも簡単に変わつてしまつたのは、人生つてもんはつくづく行き当たりばつたりだ。ただこういう変わり方なら悪くない。

賑やかな生活、賑やかな食卓。

今まで俺の人生に足りなかつたものが与えられたことに、気がつくと俺はそんな変化をとても嬉しいと感じていたのだ。

「あれ？フタバとミツバは学校まだないのか？」

今だ呑気に朝のアニメを見ている一人を見て、結局朝は洗い物をすることになつた一葉に問う。

「二人は来週からなの。でもよかつた、Tシャツだけでなんて学校行かせられないよ」

「そりやそうだ」

洗い物中の一葉の横顔が悪戯小僧のように笑うのが見える。

なんでこれで人見知りなんだ・・・。

普通に俺とも話してはいるし、今のも自然で可愛い笑顔なんだけどな。

「・・・?どしたのハルキ？私の顔に何がついてる？」

「おわ！え・・・いや・・・」

いつの間にか洗い物が終わつて いたようで、ボーッと見て いたのが ばれたらし い。

一葉は不思議なものを見るような様子で、やれととと首を傾げている。

「…………ハナ、泡ツイてるだ」

「えー！ウソーー？」

素早く鼻を隠すように手で覆つて、ビードルと慌てふためく一葉。

「ウソだよ」

「ええ！？ も、もう！」

俺の機転の効いた言い訳は見事に成功したわけだが、一葉からプロレスラーも顔負けのチョップをお見舞いされたのには驚いた。意外と乱暴な奴である。

かなり痛いし。

ていうかこの三姉妹はチョップが好きだな。

俺が制服に着替える頃、ようやく一つ重要な問題に気がついた。よくよく考えれば一葉の制服がない。というか大体の物は灰と化してしまったわけで、教科書も学校鞄なんかもありやしない。

「ヒトハどうする？ 今日休むか？」

いくらなんでもジャージで登校は酷すぎる。昨日すぐ洗濯して乾かしたが、所々煤けて黒ずんでいるし。

しかし一葉は、

「行くよ。授業も遅れちゃうし……折角新しいクラスなんだもん。今度こそは溶け込みたいよ……！」

と大きな使命に燃える表情で、下唇を噛む。

「それに……」

二の句を告げる前に俺の方へ顔を向けると、上目遣いで朝日にも勝る笑顔をくれて、

「ハルキもいるし……ね？」

そつ言葉を繋いだ。人に必要とされることが言い表せない程嬉しいものだとは思わなかつたから、つい俺は恥ずかしくなつてそっぽを向く。

「お・・・・おお、まあなんかあつたら言えよ・・・・」

「うんー。」

一葉なら大丈夫さ。

その明るさなら誤解だつて解けるし、友達だつてすぐに沢山できるようになる。そのためのお手伝いなら、喜んで引き受けたるぞ。

「あらあら、ハルちゃんヒトハちゃんおはよー」

古めかしい錆がかった鉄製ボロ階段を一人で下りて行くと、俺達を一緒に住まわせるという奇天烈妙案を提案した大家のおばちゃんが、いつも通りアパート前を竹箒で掃いでいる。

「おはよおばちゃん」

「おはよおばちゃん」

一葉が深々と挨拶すると、あらあらなどと言しながらおばちゃんもすかさず直角お辞儀。いつもフランクな挨拶しか交わしてなかつたもんだから、かなり新鮮である。

「フタバちゃんとミツバちゃんは?」

頭上にクエスチョンマークを出すよつに首を傾げるおばちゃん。

「小学校は来週からなんだと」

「そりなんだあ。じゃあお留守番なんだねー」

泡のように笑顔が弾けて、そのままいつも通りに柔らかいいつてらつしゃいをプレゼントしてくれるおばちゃん。俺と一葉も釣られて浮かぶ笑顔で手を振り、その場を離れた。

状況が変わらうがやることはさほど変わりやしない。

そう簡単に日常が180度入れ代わるなんてことはない。

ただ、問題はここからだ。

だいたいこの時間に家を出ると、必ず登校中出会う奴がいるのだ。

一葉には言つていない。

一葉の人見知りとやらを治せるかもしれないからだ。それにあいつらなら誤解もすぐに解けるだらうし、少し・・・といふかかなりアホだが氣のいい奴らだ。

この作戦は上手くいくはず。

下りの急勾配を木々の隙間から覗く朝日に眼を眩ませながら歩いていく。いつもは一人のこのゾーンも、一人で歩くと何やら新鮮な雰囲気である。これで平坦道だったら、いい散歩コースなんだけどな。そんな事を考えながら、ただひたすらにお互い無言で歩いていると、道路を焦がす音が聞こえてくる。

この音はスケボーだな。

そんな音がだんだんと近づいてくる頃、俺が振り向くと予想通り筑紫正志が颯爽と愛機で滑つてくるのが見える。ただ遠目に見ると、何やら顔が強張つていて、いつもならもうスピードを落としていてもいい距離なのだが、筑紫は一向にスピードを落とす気配はない。考えるのもつかの間、挨拶も交わさず猛スピードで俺達をかわして去つていってしまった。

「あ、おい筑紫～！……なんだあいつ……？」

「友達？」

「ん、おお、そりなんだけど……」

一葉も不思議そうに、高速で下つて行く筑紫の後ろ姿を眺めている。気付かないなんて事はないと思うんだが、一葉と一緒にだから他の奴だと勘違いしたのか？

といつても栗毛なやつなんて他に知らないんだがな。

しばし豪快なシカトを決め込んでくれた友人の後ろ姿を眺めて、仕方がないので再び歩きだす。もう少し下ると平面道路となり、交差点へと差し掛かる。そこではもう一人腐れ縁のイケメンがいるはずだ。

「…まあ、本当は会わせたくないんだが、一葉の人見知りを治してやるためだ。」  
妥協してやることにする。

「あれ？さつきのスケボーの人じやない？」

まもなく坂道も終わりに差し掛かる折、一葉が前方を示す。見れば

筑紫と例のイケメン佐久間恵介が、何やらじりじりとこちらを見ながら話し合いを繰り広げている。

「おーい、筑紫／佐久間／」

俺は何の気無しに一葉を伴つて声を掛けると、筑紫が俺に任せてくれと言わんばかりに佐久間を制して、俺達の元にゅうりと近づいてくる。その表情は深刻そうなようで、驚きも滲み出しているような複雑そうな面持ちだ。

「ハルっちゃん・・・」

頭を俯かせながら仁王立ちし俺達の前に立つ筑紫は、よく見れば肩を震わせている。そして顔を上げ、眼を見開き光線でも出しそうな眼光で俺達を順に見ると、

「逆タマかコノヤロー！！」

と周囲も気にせず咆哮した。

筑紫のアホ発言で人の多い交差点での視線は俺達の独り占めである。つていうか対面早々何口走つてやがるんだこいつは。

「ハルっちゃん！－そりや確かに昨日ちょっとお話して顔見知り程度にはなつたけど－その次の日朝帰りしてくるようなナンパな奴に育てた覚えはないぞよ！」

お前に育てられた覚えもないけどな。

とこいつが見た目だけならお前のほうがよつぽど軟派っぽいぞ。それよりも、もしかして俺達つて傍田そんな風に見えてるの！？

「ば、ばか違うよ、ヒト・・・じゃなくて碧原はな・・・」

「そ、そう！そこでばったり草野くんと会つてね！そつそつ偶然！だから今日は悪いけど草野くんは私と登校するから！

「あ、つと、お、おいヒトハ！」

俺が事情を説明する前に、一葉は何やら頬を真っ赤に染め、大変慌てた様子で俺の袖を掴んでその場を去ろうとする。ぐいぐいと引つ張られ、先程の一葉の大声に驚き、面喰らつて呆然と立ち尽くす筑紫を後方に眺め、その先でも口を開けイケメンが台なしの表情でほうけている佐久間の横を掠め、引きずられながら俺は助けを請うよ

うにもう一方の手を一人の後ろ姿に差し向ける。

だが「一人は見ていないのか気づいていないのか、ただ先程俺達がいた場所を見つめているだけのようだった。

「人が見えなくなる頃に、ようやく引っ張る一葉の手は離れた。

「ど、どうしたんだよ急に・・・?」

「重大な事忘れてたわ」

「重大な事?」

俺がオウム返しに返答すると、一葉は「くじと一つ頷き、何やら再び頬を染めて目線を外す。

「わ、私たちが一緒に住んでるってこと・・・、内緒にしといたほうがいいんじゃないかな・・・」

「え? なんで?」

「だ、だって! 普通に考えて一緒に住んでるとかおかしいじゃん! べ、別に付き合つてるとか・・・、そんなんじゃないんだし・・・。」

「・。っていうか噂広まつたら先生とかにもバレるかもしれないし! 一葉の言う事は一理あるな。こんな事が知られたら世間的にあまりいい印象はないよな。俺らまだ高校生だし、何より一葉が生活する場所を失うのは困る。

「一葉や三葉はまだ小学生なんだ。  
大変な思いはさせたくない。」

「そうだな。とりあえずは内緒にしどう。俺とヒトハは今日の朝バッタリ会つて、家が近い事を知つて、『気を許す友人となつた。いいか?』

俺が提案すると一葉は潜入捜査の作戦を聞かされる部下のように頷いた。

「あと、もう面倒だから言つたけど、まずはさつきのあいつらと友人になつてもらひうぞ」

「え・・・できる・・・かな・・・?」

「大丈夫、奴らは今後クラスの中心になつる素質を持つた一人だ。」

そんな一人と気軽に話すヒトハの姿を見た他の連中はどう思つ?」

「・・・どうなるの?」

「ああ、もしかして碧原さんって実は愛想が良くて話しやすい人だつたのねつ! キラキラ・・・といつことになるはずだ」

「そつか! ジヤあガンバル!」

単純に納得して、胸元で小さくガツッポーズを作つて奮起する一葉。俺の渾身のギヤグ混じり女子物真似を華麗にスルーしてくれるとは・・・。

まあ俺だつてそんなに社交的つてほどでもないんだが、先程の様子を見ていると極度の人見知りらしかつたな。筑紫に言い訳してるときも顔真つ赤だつたし。

俺と初めて会つた時はそうでもなかつたんだけどな。  
まあそれどころじやなかつたてのもあるけど。

「うげ・・・・!」

「ん?」

そろそろ学校が見えてくる頃、一葉は一瞬蛙の声と聞き間違うほどの声を出して、動かしていいた足を止める。一葉が見つめている先に俺も視線を移すと、一葉よりさらに一回り小さいうちの学校の制服を着た女の子二人組がスカートの前で手を組んで佇んでいる。

「「お嬢様、おはようございます!」」

一糸乱れぬ動作で綺麗にお辞儀をして、二人は微笑を浮かべながら俺達の元へ滑るようなステップで近づいてきた。

よく見れば二人は同じ顔。要するに双子だ。襟足を短く切り揃えたボブカットで、ほんのり染められる頬は西洋風な一葉とは逆の、ひな人形のようなイメージだ。そんな二人の行動は、まるで二人の間に鏡が隔てられているように、先程から全てが真逆である。

「もう! 撤収撤収! 見てわからない! ? 友人と登校中よ!」

だんだんこちらの方が違和感が出てきたお嬢様口調で一葉はシッシと追い払いにかかる。

「「これはお嬢様! ? 何故ジャージで? 登校を?」」

「き、気分よ！いろいろあるの！いいから今日は行つた行つた！」

一葉の素つ気ない態度に二人は大層堪えたのか、目に見えて肩を落としながらその場を去つていく。

まるで敗残兵のようだ。折れた刀が錯覚で見えるぞ。

「・・・あの二人は？」

聞かなくても大体察してはいるが、一葉が頬を膨らませ話したそうにこちらを見ているので聞いてやることにする。

「あの二人から始まつたの・・・。私がお嬢様だかなんだなんていふ噂は」

「そりやまだどうして・・・」

「この学校に入学した初日に、いきなり大声でお嬢様～！なんて擦り寄つてきて・・・。あとはこの通り・・・」

なるほどね。

付き纏われて勝手に周りが勘違いつてことか。にしても一葉のお嬢様オーラは相当の物だな。誰が見ても美人であるし、高嶺の花的なもんが人が近づくのを邪魔させてるんだろう。

「あの娘達、別に悪い娘つてわけじゃないの・・・。ただなんか憧れだとか、勝手になんか勘違いして・・・、それでなんか夢壊すのも・・・と思つて・・・それで・・・」

「お嬢様に成り切つてたら、いつの間にかクラスでも避けられてた・・・か」

「は、はつきり言つな！」

膨らませてた頬にさらに空気を溜めて俺の脳天にチョップ一回。地味に痛いからやめてくれ。

それにしても人見知りにお人よしも相俟つて、誤解も解けずに明け暮れてたわけか。

でもなんだろうな。何か引っ掛かつてゐるんだが、一葉の誤解がすぐにも解けてもおかしくなかつた一つのピースがある筈なんだが・・・。ぐるぐると頭の中で巡る記憶を辿りながら思案するが、俺のしょぼい脳みそはなんの答えも出してはくれず、あえなく検索を終了

した。

「そういうやあ先生には制服のことなんて言ひつんだ？」

「ん？ そうね・・・火事の事言つと新しい住所とか聞かれるし、まあなんか適当に話つけるよ」

「そつか」

「ヒットハー！」

学校へと到着し、ガヤガヤと騒がしい昇降口で周りを凌駕する声量でやつてきたのは、先日スーパー南田でバタリと会い、一応？友達とことになった今年からのクラスメート枝村葵である。

「アオイ～！」

猛スピードでやつてきた彼女は突進するように一葉に抱き着く。エンド～と聞こえてきそうな程の熱い抱擁だ。犬の頭を撫でるブリーダーのように、一葉の頭をわさわさ撫で回している。

「も～ヒトハなんで昨日ガツコ～ないんだよお～！ 初日は一番大事だつて言つたろう～」

「だつてだつて～・・・」

「あたしの素晴らしいスピーチも聞き逃すし、チミは今回こそは誤解を解くという気がないのかね？」

「あるよお～・・・でもハルキが助けてくれるつていうし・・・一葉から俺の名前が発せられると、たつた今気づいたかのようこちらに振り向く枝村。

「ハルくん！ おはよ～！」

にこりとハイビスカスのような笑顔。

「お、おお、おはよう枝・・・じゃなくてアオイ」

そういうやあ名前で呼べって言われてたな。

「早速ヒトハと仲良くなつたんだね？」

「ああ、まあ色々あつてな」

「あ、あれ？一人はもう顔見知りなの？」

一葉が不思議そうに双方に目線を移らせながら眼をぱちくりさせる。「顔見知りどころかあたしたちはヒミツを共有しあつてモダチなのさつ！」

「ヒ、ヒミツ？」

「それはヒトハにも教えらんないなあ。ヒトハにも書つた事ないヒミツだもんつ！」

ふふんと鼻高々に腰に手を当て返り返る葵。

その様子を見た一葉は少しムツとして、

「わ、私だつてハルキとヒミツ共有してゐるよーア、アオイには言つてあげないもんねー！」

と、玩具を独り占めしたい子供のように対抗する。親友に隠し事されるのがそんなに気に入らないのか。

「なにおーー！」

再び一葉の頭を抱きしめて片方の手でポカポカと小突いている葵。しかし一人の共に悪戯な笑みを浮かべているところを見ると、これが二人の在り方なのではないのだろうか。そんな様子を見て先程暗闇に消え去つたピースが再びゆらゆら現れ、かちりと嵌つた。

そうだ、何故こんなにも明るくて人懐っこいムードメーカーな葵がいて、一葉の誤解が解けなかつたんだろう。葵と一緒になら避けられるどこのか人気者間違いなしだと思うのだが。

「アオイ・・・、ヒトハがみんなにあらぬ誤解をされてるの知つてたんだろ？」

「え？ うん・・・」

一葉の柔らかそうな髪をぐしゃぐしゃにしていた手を止め、葵は申し訳なさそうにこちらを覗く。

「なんでもつと早く誤解を解いてやるつとしないんだよ？ ヒトハが

それで悩んでたの、親友ならわかつてたはずだろ！」

思わず語気が荒くなるのがわかる。登校時間帯のため、昇降口の視線は独り占めだ。

「・・・・・」

俺の批判の言葉に葵は俯いてしまう。折角できた新しい友達に朝もはよから注目を集めての怒声。もはや救いようのない俺である。しかし学校でも一人で、火事にも見舞われて、こんなにも不幸の一途を辿る一葉を俺はどうしても放つておけなくなっていた。

こりやもう葵には話かけてもらえないかもな。

「だつてあたしも友達いなかつたもん。ヒトハ以外に」

「そんなの理由になるか！・・・・・つて、へ？」

葵の言葉の意味を瞬時に理解できなかつた俺は、思わず勢いで文句を垂れてしまつたが、葵に友達がいない？

一体何の冗談だ？

しかしどうやら冗談ではないらしく、その表情は俺が思い描いていた葵へのイメージとは掛け離れたもので、明るさの発電源はどうやら、憂いを帯びた淋しく切ない表情で眼を逸らしていた。

「う・・・・、嘘だろ？だつて、俺とは普通に話してたし自己紹介だつて・・・・あんなに楽しそうにしてたじやんか・・・・」

「へへー、あんなの狂言さつ！ホントは新学期デヴィイウーしようとしてたのはあたしだー・・・なんてね、へへ・・・・」

最後は感情を吐き捨てるように言葉を紡いだ葵は、既に落としていた上履きを履いて足早にその場を去つた。

「ア、アオイ！な、なんで・・・？」

「・・・・・・アオイが避けられ始めたのもたぶん私のせい・・・・。私が避けられ始めた頃も、アオイは変わらず私に接してくれたから・・・・」

「・・・・・・・・俺、あいつにひどい事を・・・・・・」

事情も知らずに責めてしまつたことへの後悔と同時に、ふつふつと

心の奥底から怒の概念が湧きだしてくる。

「ハルキ、アオイは見た目ほど強くない。強くないよ」

そんなのもうわかってるよ。

もう俺のすべき事は決まった。

面倒臭がりの俺だが、見て見ぬ振りするほど落ちぶれりやいないぞ。

朝のホームルームも岩崎教諭の快活な声で締め括られて、5分後から始まる今年最初の授業の用意を各自始める。早速の1限は物理で移動教室のため、すぐにでも新たなクラスメートとお話に花を咲かせたい生徒にとつてはとんだ誤算である。

「おーいハルつちゃん！次移動教室だろ？行こうぜ行こうぜ～」俺が机の中の教科書を漁つていると、筑紫が紫のマフラーと身体を揺らしながら佐久間も伴つてこちらへ片手をあげながらやつってきた。そのマフラー先生に注意されんのか？

「二人とも悪いな。先約が入つてるんだ」

「先約？」

筑紫は黒縁メガネの奥で眼を見開かせる。

なんだそのお前に他に友達いたつけ？みたいな眼は。

「ハルキ早いな。もう新しい友達できたのか！」

佐久間が清涼飲料水のような笑顔で大層嬉しそうにしきりに頷く。いちいち人の行動に喜びを感じる奴である。まあ嫌ではないけどな。

「なんだよハルつちゃん！水臭いな～。俺達にも紹介してくれよ」

筑紫は猫撫で声で氣色悪くブレザーの袖を引っ張つてくる。

「おうそのつもりだ。だがこの移動教室だけはちょっと待つてくれ

「なんどよ？」

「見せ付ける必要があるからだ」

筑紫が再び疑問詞を口に出す前に、俺は席を立つて行動に移す。幸いまだ半数以上のクラスメートがこの教室にいる今が絶好のチャンスだ。俺は教室最後尾の席から、先頭に座る一人の女子と側にいるもう一人の女子の背中に向かつてこう叫んでやつた。

「ヒトハ！アオイ！次物理だよな！一緒にこうぜ！」

氣だるさN.O.・1を決める大会があれば準決勝までは残る自信があ

る俺の精一杯の明るさで、教室中に響く声で言つてやつた。まだ教室全体がお互いを様子見している状態だつたため、さほど騒がしいほどではなかつた教室の空気はさらに冷却し凍結した。しかも俺が話しかけたのは学校でも随一のお金持ちと噂の一葉とそのお親友葵だ。しかも軽々しく呼び捨てである。江戸時代なら無礼者！と斬られても文句は言えないだろう。

一瞬の無音が響く。

笑顔状態の俺がそのままの笑顔でちらりちらりと周りを見渡すと、教室のクラスメート達は案の定呆気に取られていて、後ろでは筑紫と佐久間も大口開けて間抜け面。俺の声と同時に振り向いた一葉と葵もUFOでも見たかという表情でこちらを凝視している。なんだこの文化祭で一生懸命みんなで力を合わせて作った出し物を壊しちまつた時のようなやつちまつた感は。

というか一葉も葵もボーッとしてないでフォローしてくれよ！

恥ずかしさと気まずさで俺のハートは口から大脱走を敢行してしまいそうだ。

「　　い、いいよハルキ！　アオイも行くでしょ！？」

「　・・・へ？　・・・あ、う、うんつ！　行く行く～！」

一時は何事かと呆けていた一人であつたが、俺の意図を察したのか大根役者よろしく乗つてくれた。一人の了承を得たのを機に、俺は二人を連れだつてそそくさと教室の外へ出る。それと同時に教室内がざわついたのがわかつたが、今はそんなことはどうでもよかつた。

「　ふはあああ！　息するのも忘れてたぜ～！」

「　・・・ハルくん？　なんで私たちを？」

胸の前で教科書を抱えながら、後ろをついて来る葵が申し訳なさそうに問い合わせてくる。

「　・・・・・心配すんな、おまえらの新学期デヴィイターは必ず成功させてやつから」

「ハルキ・・・」

「い、言つとくけど、俺の大声はレアだからな。耳に焼き付けとけ」

もうあと五年はないといつくらい目立つた瞬間だつたな。大多数の前で大声張るなんて金輪際したくないね。でもこうする」とくらいしか、俺なんかにはできないんだからさ。自分ができる」とをやりやいい。

「・・・・・・へへ・・・・あつははははー。」

発電所は再び復活したのか、葵は溜まり溜まつたパワーを吐き出すように吹き出した。

「ふふ・・・・流石あたしのトモダチだねー！」

「そりやどうも」

どうやら一世一代の大勝負は成功したらしかつた。

とんでも物理の授業。

初っ端から実験をするという暴挙に出た禿げた物理教師は、三人組を作つて勝手に始めといてなどと教師にあるまじき適当に何やら自分の作業に没頭している。

「ようしつ、ハルっちゃん説明してもらおうじやん」

「え？俺が物理苦手なの知つてるだろう」

「ああ、そつか！忘れてたわ～・・・つて、その説明じやない！？」  
息巻く筑紫は何とかナトリウムだかの何とかを手に突つ込みを入れてくる。

「じゃあなんだよ？」

「なんでチミは新学期開始早々からべっぴんさん一人侍らせているのかいー。」

言い回しが昭和だし、侍らせた覚えもないし。

「まあ、何事にも関わりたがらないハルキが一人の女子を連れだつて移動教室だもんなあ」

考える人みたいに見せながら冷静に解説する佐久間。ていうかお前ら俺の事一体どう思つてるんだよ。

「まあ昨日一日で色々あつたんだよ」

「だからその色々つてなんだよー！」

アルコールランプ持つてゐる手の指で犯人はお前だ！みたいに俺を指すな。

仕方ない、アホなこいつらにも理解しやすいよつ説明してやる」とにしよう。

「・・・例えばだ。オセロで俺の白駒がほとんど相手の黒駒で埋められてるとする。ただし逆転可能の四隅は開いてたんだ」

「なんだその解り難そうな例えは？」

「いいから聞け。そこでなんと何の因果か知らんが、俺の白駒が四隅全部に置かれたんだ。しかも順番無視で」

「ほうほう」

「するとどうだろつ？盤面の黒優勢の筈だつた状況が全て白駒にひっくり返つた！大逆転勝利！やつたね！・・・これが昨日一日を表す最もわかりやすい例えだな」

筑紫は少し思案するようにオシャレ気取りな黒縁眼鏡をあげてから、佐久間顔負けな涼しい笑顔を浮かべた。

「なるほど、全くわからん！」

「これ以上簡潔に説明することはできん！」

「まったく簡潔じやねえじやねえか！つやむやにしようつたつてそ  
うはいかんぞ！」

わあわあと筑紫と戦い争つてゐると、佐久間はしたり顔で口を開く。

「・・・それつて、ハルキにとつては喜ぶべき出来事だつた・・・  
つてことだよな？」

たつたの一日で、日常の平和で平凡な生活が一変した。変わらなくていいと思つていて普通な暮らしにメスを入れたような出来事に、俺はどう思つてる？

「・・・どうだらうね」

直ぐに答えを見いだせなかつた俺は、少し苦笑いして答えてやつた。佐久間は俺の答えに満足しなかつたのか、一の句を告げよつと息を吸い込んだ所で授業終了のチャイムが鳴り響いた。

少し開いて昼休みの事である。

俺は筑紫と佐久間と弁当を連れだつて、一葉の席へと向かう。勿論目的は一つ、こゝちらと仲良くなつてもらつて、クラスに一刻も早く馴染んで貰おうという魂胆だ。食卓・・・とは違うが、皆で飯をつつきあえればどうあつても仲良くならざるを得ないだらつ。いわゆる完璧なプランつてやつだな。

「ヒトハ～、飯一緒に食おつぜ～」

「あ、うんいいよ！」

俺が声を掛けた途端、振り向きざま大層嬉しそうに笑顔をくれる一葉。

よほど誰かと飯食えるのが嬉しいのかな。

「こいつらも一緒にいいだろ？」

「どもども！ 筑紫正志でーす！」

「佐久間恵介だ。ハルキの友達なんだけど、一緒にいいかな？」

相変わらずアホさを醸し出している筑紫と、落ち着いた笑顔で王子チックに問い合わせる佐久間。

「え！ ・ ・ ・ あ、は、はひ！ ダイジョーブデス・・・」

手元でスカートを握つてすつと俯き、声を裏返させながら答える一葉。顔がトマトのように真っ赤であろうことは、流れるよつなサイドの髪で隠れていはいるが、大体想像がつく。

本当に大丈夫かな。

「どうかまさか佐久間に顔を赤らめたわけではあるまいな？」

「およよ～」はんたべるのかい？ あたしたちも一緒にしてよろしいかなつ？」

ふと後ろから声がすると、いつもの快活な様子で葵がやつてきた。しかし葵の隣に眼を移すと、もうひとり女子を連れだつていた。

「・ ・ ・ ・ 」

葵に無理矢理引っ張られた形で田線だけくれたその娘は、綺麗に切り揃えられた前髪、胸の辺りに下がる髪はウェーブしてふわふわとした印象。しかし細い眉は鋭くボーグッシュで、切れ長でありながら

らくりつと大きい眼に奥一重が特徴的。不機嫌そうな少し尖った唇も相俟つて、少年のような印象も受ける。

可愛いと捉えるよりも格好よい美人と言つたほうがいいだろう。彼女は目に見える程度に頭を下げて、すぐにそっぽを向いてしまつた。

「さつきの物理の授業で一緒になつてさつきと一緒にいいでしょ？」  
後ろに隠れるように立つていたその娘を、紹介するように背中を押して前に出す葵。ほうほうと肘で発言を促す葵に、少し疎ましい表情を返しながらも、彼女はようやく口を開いてくれた。

「・・・花咲嘉穂」

ぶつきらぼうに答えてその場を離れると、仕方なさそうに自分の席の椅子を寄せて一葉の前に腰掛ける花咲。

「よおーし！俺も椅子もつてこよー！」

花咲が座るのを皮切りに筑紫も動き出すと、残りのメンバーもつられるように一葉の席へと椅子を運ぶ。流石に六人となると一つの机では狭いため、隣の葵の席もくつつけて食べことになった。

おお、なんというか普通に一葉人気者みたいじゃんか。

いい傾向だな。

「あれ？ ハルキ今日コンビニ飯か。珍しいな？」

佐久間は俺が鞄から出したコンビニ袋を見て不思議そうな眼を向ける。それもそのはず、学校始まって以来昼飯をコンビニで買うなんて今までなかつたからな。しかし必ず弁当を作つてきいた俺の記録が途絶えたのは、

「あれ？ 一葉もコンビニのかい？」

葵もさも不思議そうに一葉に問い合わせる。

「う、うんちよつと今日は寝坊しちゃつて・・・」

「寝坊つて、フタチヤンとミツチヤンも遅れちゃうじゃん？」

「え！？ や！ フタバ達はガツコまだでさ！ それできょつと油断しちやつた！」

「へー珍しいねえヒトハが〜」

どうやら一葉も弁当派だつたらしいが、べつに寝坊して弁当が作れなかつたのではない。いや一葉は寝坊だつたが、ちゃんと弁当は二人分用意してあつたのだ。しかし一葉が、弁当が全く同じなのは流石にまづいでしょとうことで、仕方なく置いてきた。

今頃お留守番の一葉と三葉が喧嘩でもしながら食べている頃だろつ。「ねね、サツキーはなんであたしたちと友達になつてくれたんだい？」

各自弁当箱を開けていただきますを済ませてすぐ、葵は早速にも本題と言つていい質問をぶつける。

それは俺も是非お聞きしたかった。

「べ、べつに物理でちょっと一緒にだつただけでしょ……。つていふかサツキーって……」

「でも一緒にご飯食べててくれるじゃん？あたしと一葉の噂知らないわけないのに」

うつとうしそうに葵を一瞥した後、ボーアイッシュな印象とは打つて変わる可愛いらしさピンクの箸を弁当箱に置くと、ジーッとの場にいる全員と眼を合わせた。

「……まあ、しいて言えば面白そつだつたから……かしらね」そう呟いて目に見えるか見えないか程度に微笑すると、また箸を手に白飯を粒単位でちびちびと食べはじめる。

「ふ、ふーん！ま、まあそんなに言うなら仲間に入れてあげないでも……ないけど？」

そんな花咲の様子を見て、一葉がとばかりに初めて出会つた時のような尊大な態度で腕を組む一葉。

なんでそこでお嬢になるんだよ。

ご飯粒鼻につけて言つ台詞でもないぞ。

「別に仲間になるとは一言も言つてないわ。……鼻、ご飯粒ついてるわよ」

花咲は黙々と自分の弁当に手をつけながら、一葉の発言にピシヤリ。

「うそどこ？……じゃなくて、な、なに……」

ガタツと椅子を後ろに倒すほどに立ち上がる一葉。妙な所でプライド高いんだな。

「どうかご飯粒はいいのか。

「そんな事だからお金持ちはなんだと勘違はられるのよ

「・・・え？ 気づいてたの？」

一葉の問いに花咲は、少し一葉を一瞥して、

「登校からずつとジャージ姿の御令嬢がいるかしら」と不敵な笑いで嘆息した。

「一葉、これは違うの！・・・つていうかお金持ちは違うのは合つてるつていうか、ジャージで登校するしが違つて、一葉・・・

・つもう！ ハルキ説明して！」

「はつはつは・・・つて俺！？」

無茶振りにもほどがあるだろ！

つていうか同居してんのばれたくないのにここで俺に振るか普通！？顔真っ赤にしてわたわた胸の前で手を振りながら慌てている一葉に冷静な判断は無理なようだつた。急に視線と矛先が俺の方に向けられたため、事前に考えてあつた完璧な言い訳など宇宙の彼方へ飛んでいつてしまつたようだ。

「・・・なんというか、その・・・な？」

俺が視線を泳がせながら、新たな言い訳を開拓しようとこうつて、このクールビューティーはさうなる追い撃ちをかけてくる。

「・・・というかあなたたち付き合つているの？ 朝から仲良く登校していたみたいだし」

「は、は、はあ！？ 付き合つてなんか・・・ないわよーあるわけ・・・な、ないじやない！」

朝目撃されてたんですね。

といふか一葉さん、あなたもそんな顔をたこのように真っ赤にして全否定せんでも・・・。だんだん俺の居場所がなくなってきたよ。一葉は息を荒げながらコンビニやぼる弁当をがつ食つてする。

「まあまあヒトハ落ち着いてつー付き合つててる付き合つてないはま

あ置いておいて、いつのまにハルくんと仲良くなつたんだい？」  
怒る一葉を制して、葵は興味津々といった表情であまり聞いて欲しくない質問をぶつける。

「そりそり！登校んときも、かなりハルちゃんのウチの近くから既に一緒に歩つてたしよお」

「余計なことを言つんぢやない！？」

筑紫がさらなる言い訳必要な懸念材料を増やしてくれやがつた。くそ、まだ考えがまとまつてないつていうのに！

「そうだな～。碧原が初つ端からジャージ姿つていつのも気になるしな」

サクマ、お前もか。

ああもう今まさに力エサルの気持ちが痛いほどわかるよ。佐久間くん、君だけは僕を裏切らないと思つていたのに。ただ確信犯だつたブルータスと違つて、無意識で核心を突くような攻撃をしてくる佐久間は厄介極まりない存在である。

「 命の・・・恩人かな」

頭の整理のつかない俺を現実に戻したのは、囁く様に発した一葉の言葉だつた。

「ハルキはね・・・枯れ切つた雑草に水をくれて生き返らせてくれた、私の恩人なの」

憂いを帯びた表情に控えるように見せる微笑が、俺の眼にとても優しげに、そしてとても美しく映せた。

・・・鼻にご飯粒付いてるけど。

「ヒトハ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・やー雑草とか水とかは何といつか・・・例え！そつ比喩表現といつか！・・・・・うつ、・・・・・そつ！私が制服で川で溺れてるところを助けて貰つたのが本当のお話ー制服がボロ雑巾に大変身しちゃつて、なんつって！あははは・・・急にまた顔を真つ赤にさせて、ごちゅごちゅと早口で捲くし立てる

一葉。そして言葉の最後で恥ずかしさが頂点に達したのか、また俯いてしまつ。

といふかその一瞬でばれそうな嘘はなんだよ。

それまさか先生にも言おうとしてたんじゃないだろ？

「・・・・・・・・・・・・

一葉の急な発言に、皆箸を止めて眼を見開きながら呆然としていた。

「・・・ヒトハ」

先陣を切つて口を開いたのは葵だ。

「大変だつたねえ・・・・・アンタ泳げないんだから川の近くに行つちやだめだつて言つたろう？」「

何やら瞳に涙を浮かべながら俯く一葉の頭を撫でる葵。

・・・・・・・・・え？これ信じたの？

「おじおいマジかよ！結構な事件じやんか！いやあ本当良かつた！俺がハルっちゃんを育てた甲斐があつた！」

筑紫も大層驚いたように見せて体全体を使って一葉の生還を喜んでいる。何度も言つがお前に育ててもらつた覚えはないけどな。

「やうだつたのか！ハルキスごいな！溺れている人を助けるなんて、なかなかできることじやないよ！」

あの秀才佐久間でさえも、まさにお前の喜びは俺のもの、俺の喜びも俺のものと言わんばかりに、オーロラのよつな笑顔を振りまいてくる。

ちよつと待つてくれ、これつてリアリティある話かな？

事情を知つてゐる身としては、学校サボりの理由に「父が危篤で」の次に胡散臭い理由だと思つてゐるんだが。まあ火事のことも同居してゐつてことも事情を知らない側からしたらかなり胡散臭い話ではあるが。それでも、人の命が救われたことに素直に喜んでくれるやつらがいる。そんなアホで純粹なやつらの方が、一緒にいて楽しいことも確かなのだ。だから俺は、見た田どうにも合ひそうにない筑紫と佐久間とつるんでいるんだ。そして葵も花咲も、そういう心を持つてゐるから、こうやつていつのまにか集まつて笑いあつてゐる

だろう。

嬉しいのか感動しているのか、一葉は未だ俯き葵に撫でられながらうんうんとしきりに頷いている。

理由が嘘でも、これだけ心配されれば、嬉しいだろうな。

「・・・新学期早々に何事もなくて良かつたわね。それで碧原さんは草野くんが好きになっちゃったのね」

「うん・・・・・・・・ん? ってだから違あああああああああああああああう!」

このクールビューティーもどこか抜けている娘である。

「ただいま」

学校を終え、帰りに一葉と夕飯の材料を買いに行き、我が家に到着。現在18時前。学校は4時に終わり、平常通りであれば一度家へ帰つて自転車を走らせ、麓の小さなスーパー南田でさつさと材料調達を終えて、5時前には家に着いている筈である。

しかし一葉は、

「え？ このまま行つたほうが早くない？」

と俺の数少ない楽しみである放課後サイクリングロードをあつさり棄却して、麓の小さなスーパー南田・・・ではなく、その向かいの大型ショッピングモール「ハナオカ」へと足を向けた。何故かと言えば、スーパー南田には約束を交わしあつた友人がいるのだ。約束の共有と言うものは、お互いを信じようと心生まれるもの。葵は何やらバイトをしている事を親友の一葉にも話していないようだし、まあ俺がたとえこの事をばらしてしまつたとしても、あの葵が腹いせに俺の一人暮らし情報をどこぞのB級ドラマよろしく公にしたりはしないだろう。それに葵はそんな約束抜きでも友達でいたいと思つてゐる娘だ。

ここは現場から離れた方が無難だろう。

おっと、今は一人暮らしじゃなかつたな。

まあそんなわけで、俺はスーパー南田の存在は言わず、ハナオカへと自然に歩を進めたのだった。

ここまで良かつた。一葉の言つ通り、時間短縮という点では一度家に戻るよりは格段に早い。まあ前からわかつてたことではあるが、ただハナオカに着いてからが問題だった。

とにかく長いことこの上ない。

一葉の買い物はそれはもう東京の各駅停車のよつて、各コーナーでその都度止まつて色々な物に興味を示す。そしてまるでアイスクリ

ームを買つてほしいう子供のようなウルウル輝く瞳でこちりを伺つてくるもんだからたまつたもんじゃない。特に洋服コーナーではあれやこれやと試着も繰り返していたために、俺もつこつこつ言つしかなかつたのだ。

「あ、明日は休みだからさ！四人で来たときこじよづぜー！」

・・・まあ仕方ないさ。

一葉たちの可愛かつたであるう持ち服は全てエージェント御用達の黒服、・・・いやまあ悪く言えば炭と化してしまつたわけだし、女の子が洋服に興味ないわけない。制服も買い替えなければならぬし。

ああ、俺の怠惰で平穏で平和で淡々とした休日が・・・。

そんなことを頭の中で呑きながら、洋服コーナーに居座る一葉を無理矢理引きはがして帰つて来て、現在こんな時間である。というか学校から直接来ると帰りがきつこことにも気づいてしまつた。ビックリにしきる変わらないのかも知れないな。

「ヒトハハルキおかえりー！」

今だ貸している俺のロングTシャツを揺らし、頭の上で音符マークを浮かべてるようなテンションで一葉が出迎えてくれる。

「ちゃんと留守番してた？」

「うんしてたぞーー！お昼にオオヤがなんたら」ぼーとかいうの持つてきてくれた！」

にひひとはにかみピースサインの一葉。

おばちゃん呼び捨てかよ。

といふかそれ名前じやねえよ。

「ミツバー！起きろーー！」はんだぞーー！」

靴を脱ぎ、台所脇を通つて居間に行くと、先程まで寝ていたらしい三葉が一葉に起こされ、眠そうな眼をこすつていた。

「・・・・・耳元で大声ださなくとも・・・・聞こえてる・・・・。

・・・・・おかえりなさい」

少し機嫌が悪そうに一葉を一瞥した後、一葉がに気づいて三葉は少

し頬を緩めた。

「ただいまミツバ。眠くなつちまつたか？」

「・・・・・・ん、大丈夫・・・」

三葉は軽く下唇を噛んで今だ眠そうな眼で遠くを眺めながら答える。女子の子座りでうどうとしている姿はまるで子猫のようだ。

「へへーー！ミツバはこはんの事言つとすぐ起きるんだくいしんぼー

「それはフタバだろ！フタバカ！」

「あー！フタバとバカをくつつけたーー？それならミツバはミツバ力だ！」

「なにをーー！」

またしようもない小突き合いの喧嘩を始める一葉と三葉。まあ三葉が年相応になるのでこれはこれで面白い。一葉は少し小6にしては少し子供すぎるが。

「今日は私たちが夕飯当番だよね」

「おお、そうだな。じゃあ悪いけど宜しく頼むわ」

二人の小突き合いは無視して、一葉が腕まくりをしながらやる気に満ちた表情を見せてくる。そういうえば、女子の子からの手料理なんて初めてだな。これは役得役得。

「おつけーー！じゃあミツバお願ひーー」

「え？」

三葉は一葉を攻撃していた小さいグーの手を解いてこちらに振り向いて、小さく頷いた。

「お、なんだお手伝いかあ。偉いなー」

「私がお手伝いだよ」

お手伝いという言葉が発せられたのは、相変わらず眠そうな眼でふらふらと台所へ向かう三葉ではなく、俺の隣で綺麗に切り揃えられた爪がつく人差し指を自分に向け、満面の笑みで立つ一葉であった。

「はー？三葉が作るのかーー？」

「そー！」

語尾にハートでもつきそつたほどに可愛く答えて、「ミツバー、私

なにすればいい?」などと言しながら二葉の方へ向かつた。

三葉つて料理できるのか!

何から何まで大人びてるな。というか末っ子つて甘えん坊だとかとなんかの本で見た気がするんだが、全然そんなことないんだな。俺なんかよりもずっとしつかりしてるわ。そんな事を考えながら、手持ち無沙汰になつた俺は、ふと遊びの相棒を失つて同じく暇という宝を手に入れた二葉と眼が合つた。

「・・・二葉はお手伝いしないのか?」

「だつて手伝うとミツバがうつさいんだもん!あんたは食べる係とかいつてのけ者にするんだ!」

大体想像はつくけどな。

「・・・・・・・・フタバはすぐ余計なことするから・・・」

「」の前だつてちょっとミツバの顔にお塩ぶつかけちゃつただけじやん!」

それは誰でも怒るぞ。

三葉の素つ氣ない指摘に二葉は頬を膨らませ、台所で手際よく野菜を洗つている三葉の後ろ姿を睨んでいる。

「そうだフタバ、ちょっと外散歩しにいくか?」

「ここでテレビ見て笑つてるのも邪魔になりそつだしな。

「え!? ホント!? 行くー!」

頬に膨らませていた風船を一瞬で割つて、猪も顔負けのタックルで抱きつく二葉。胡座を搔いていた俺は少し後ろにのけ反つて、二葉の体重」と堪える。

「もう暗いけど今日は晴れてるし、もう少しよこに向かえば星が見えるかもな」

「星かー!綺麗かー?」

「そりゃあもつ」

「おおおー行ー行ー!」

二葉は勢いよく立ち上がり、俺の手首を掴みぐいぐいと引っ張つてくる。

「おおおいおい、そんな引っ張るなって。つうわけでヒトハひょっくら行つてくるから」

「はーい、7時までには戻つて来てね」

一葉は肉を切りながら、田が離せないかわりに、声だけかけてくれた。

「ハルキはー やー グー！」

「ちょ、待てまだ靴履けてない！」

「おおおおわあああ！すつごーきれーだー！」

通学路とは反対側の坂を少しのぼつて行くと、車のすれ違いスペースが設けられている所がある。そこだけは空を隠す木々がなく、麓の町並みも一望でき、上を見上げればそこはセルフプラネタリウムだ。

「どうだフタバ、綺麗に見えるだる？」

「うんうん！すつごーいすいこまれそー！」

これ以上首が曲がらないほど上を見上げ、一葉の無垢な輝く笑顔は夜空の星々にも負けないほど綺麗に見える。姉に似て、整いすぎている顔の造形は、暗い中でも確認できる。

そういうえば、星をまじまじと眺めたのはいつ以来だろ。よく小さい頃、親に連れられて星を見に行つた覚えがある。当時の事はあまり記憶にないが、その時みた流星群の映像だけは今でも頭に焼き付いている。一葉の言う通り、不規則に流れる流れ星が、俺を吸い込んでくれるようなそんな錯覚。

「・・・フタバ、流星群つて知つてつか？」

「りゅーせーぐん？」

「流れ星は知つてるだろ？」

「うん！」

「その流れ星が、シャワーみたいに夜空を彩るんだ」

「シャワーー！？それってすごい数なのか！？」

「数え切れないほどやーーお願いだつてたくさん流れれば3秒なんて関係なしだ」

「すげー！見たい見たい！」

「今度四人で見に行くか？」

「おお！行きたい行きたい！いつ見に行く！？」

「そだなー、結構周期的に見れるらしいから、今度調べておくよ」

「そつか！へへ～楽しみ～！ハルキ好きだあ～！」

何故この流れで好かれるのかはわからなかつたが、二葉は大層嬉しそうに俺の腕に抱っこちゃん人形のように抱きついてくる。へへ～と独特にはにかむ笑顔につられて笑つてゐるしまつのは、二葉の天真爛漫な人懐っこい性格が成せる業なのだろうか。

そのままの状態で俺達はしばらく星を眺めていた。春の少し冷たい夜風が肌を擦る。傍から見ればロマンチックなカップルにも見えるが、どちらかと言えば仲の良い兄妹、はたまた身長差があるので関係良好な親子という感じだろうか。

・・・流石に兄妹で腕組はないか。

そんな事を考へてみると、二葉はさうて頭を俺の腕に埋ませてくる。

「・・・きつとね・・・・・・、わたしだけじゃないんだ・・・。

ヒトハだつてミツバだつて

「

そしてふと囁くような二葉の一言。

その言葉につられて二葉に眼を向けるが、表情は見えない。ただ腕に纏わり付く二葉の体温が少し上がるようにも感じた。いつものように白い歯を見せはにかんでいるのか。ただ声の調子は、いつもの幼さを含んだ物ではなく、落ち着いていて、それでいて温かく、優しい声であった。

「だつてさ・・・・・・・・んーんやつぱいいやー！」

腕に付けていたおでこを離して、俺を下から蕩けるような笑顔で見上げる二葉。

「へへ～ハルキもう帰るー！おいしーごはんが待つてゐるのだ！」

「・・・はは、フタバも十分食いしん坊だな」

「えー！ちがうよー！」

いいからいいからとぐいぐい俺の腕を引っ張る一葉。それに引きずられながら、さつきの言葉を頭に巡らす。

わたしだけじゃないんだよ。

この言葉はどこに繋がるんだろう。一葉が見せたほんの少しの胸中。ただ流星群が楽しみだというだけか、それとも・・・？まだ会つて間もないのに、どうしてここまで信頼してくれるのだろう。

この言葉に隠された意味を、この時の俺はまだ気づく事などできやしなかったのだ。

家に帰ると既に夕飯の用意はされており、何故か遅いと怒られてしまつた。

まだ7時回つてないのに・・・。  
でも、家に帰ると飯が用意されているなんて、いつ以来だらうな。  
なんだかジーンときちやうな。

三葉＆一葉の特製極上回鍋肉を平らげて、9時過ぎまでだらだらと居間のテレビを見ながら談笑。その後は部屋も分かれて各自就寝に向けて用意といったところ。特になんの問題もなくその日は終わるはずだった。俺はここ最近の急な状況変化のためか、布団でだらだらと小説を読み耽つていたが全く頭に入つてこず、そのままあつさり睡魔に主導権を握られてしまつた。

「・・・・・・・・・・・・ルキ・・・・

遠くの方で誰かが呼ぶ声がする。

「・・・・・・・・・・・・・・

身体を揺すられて、俺は暗闇の世界から解放された。いまいち焦点の合わない眼を凝らして、声のする方へ振り向くと、そこにはいつもポニー・テールをおさげにしている筈の三葉が、さらっと流れる髪そのままに、枕を大事そうに抱きしめながら立て膝を立てていた。

髪をトウガラシの甘辛味で叶だ。

「…………ん、ミッパ…………どした?」「んな時間」「…………」

時計に眼を向けると午前2時過ぎ。丑三つ時といわれる頃だ。

「政治小説」の歴史

卷之三

そういうえば俺の寝ている居間には雨戸があるが、向こうの和室には雨戸がない。窓の建て付けが悪く、風や雨が強いと音を立ててかなり揺れる。向こうの部屋ではやがて「お前も巻き込んでやる~」と言わんばかりに窓が奇声をはいているだらう。

小学四年生にはまだ

どうか怖いのか。

三葉にいつもの余裕はないようで、枕をぎゅーっと抱きしめ、あたふたと身体を揺らす。よく見れば震えているじゃないか。

三ノ井の新規開拓地に於ける、アーチーの活動。

自分の布団の隣を指しながら促すと、三葉は髪を大きく揺らして首を二回縦に振った。俺が布団を開くなり、逃げ込むように俺の右隣の布団の中に侵入を図る三葉。それにしてもさっきまでは気付かなかつたがかなり大雨だし風もあるみたいだな。

— 7 —

お互いに背を向けるようにして、無言の状態が続く。無言なのは寝ようとしているので当たり前ではあるが、変な時間に起きられてしまつたため、妙に眼が冴えてしまつた。隣の一葉たちの部屋ほどではないが、先程までは気にならなかつた雨風の音も、今ではいやに耳に入る。

「……………ハルキ…………もう寝た…………？」

そんなことを思つてこると、既に眠り姫になつたと思つてこた三葉が声をかけてきた。

「ん、まだ起きてるぞ」

「…………そつか…………」

「…………ぬい、ビした?」

布団の中でもぞもぞと動く三葉。

「…………手…………手…………」

「て?」

耳に入る一言では意味がわからなくてそのままに聞き返すと、三葉はまた口を紡ぐ。三葉は俺の後方で何やら深呼吸でもしてこるといつも背中を大きく動かしている。心なしか背中に感じる三葉の体温もやけに暖かく感じる。

「あの…………手…………繋いでて…………いい…………?」

「え? 手をか?」

「あ! やっぱりソレ! 今のは

「…………」

「…………」

三葉が慌てて手を振り向いたのと、俺が仰向けにして手をとったのがほほ同時に、何かを言いかけていた三葉は俺が手を握るや一度驚くよじにビクッとしたが、すぐに手を握り返してくれた。すくなく小さな手で、少しでも強く握つてしまえば折れてしまいそうだ。

「…………ねえ…………ハルキは…………」

「ん~…………?」

三葉はまた何かいい掛けで、そのまま続く言葉を口にしまつ。迷つているのか、躊躇つているのか、三葉はしつかりと俺の右手を握りながら黙りこくる。

「…………あ…………えつと…………そだ、今日の『はん…………おいしかつた…………?』

もつと重要な話を切り出されると想い、若干の拍子抜け感が否めな

いが、よく考えれば彼女はまだ小4の子供なのだ。少し大人じみた言動や行動で忘れがちになるが、可愛らしい様や怖がる姿だけ見てる普通の娘だ。先程の一葉の意味深な言葉のせいで、また何か言われるのではと過敏になつていたらしい。

「お～めがやめがや上手かつたぞ。いつから料理してるんだ？」

・・・ん、小学校入学してすぐ・・・くらいい・・・」

ましかよ そじや 料理の腕もあかるこ てもんたな

横に振り向いて三葉の顔を覗こうとするが、三葉は反対に向いていて顔は覗けない。ただ暗い中でもわかるくらいに耳が真っ赤に染められていて、どうやら照れている様子であつた。

ハルギは、何が好きですか？

「…・…・…そつか」  
「料理か？たしてしのモンは好きだけど、  
は最高だつたなあ。大好物なんだ」  
いやあても今日の回鍋肉

「う」

「……………じあ、毎田作る……………」

・・・・・・・

嬉しげにと  
流石はそりやあ餓鬼おきみそ

よつやくこちらを向いてくれた三葉は、頬をばら色に染め、少し遠慮するよつに微笑した。その大人びているよつで、無邪気な様子も絡ます笑顔は、暗い部屋の中でも輝いてみえるよつだつた。

「おやぢあひま」

結局その後も三葉は俺の手を握りっぱなしで、普段にないシチュエーションにいまいち眠気を催すことができず、悠久の夜を過ごすことになるのだった。その隣で三葉は穏やかな表情を浮かべ、とても幸せそうに寝息を立てていた。

「……………」  
……………

・・・ビットや1葉の2葉情報はかなり確かな情報筋らしい。

土曜日とんで日曜日。

買い物予定であつた土曜日は時期不相応の激しい雷雨によつて延期となり、その振替が今日である。今日は文句なしの快晴で、太陽に「せつかくの休日くらい外に出ろ」とどやされているようだ。休日という字に「休」と付いてるのだから、本来は家にいなければならぬものだと俺は思うんだがな。

おつとまた悪い癖が。

さて、今日はショッピングモールに三姉妹を引き連れて、火事で焼かれてしまつた日用品、洋服その他もろもろを今日一日で全部買つてしまおうという算段だ。勿論金も全て俺の預金からである。

・・・まあ、俺の金じゃないし無駄に有り余る金を困つている人に使つてもばちは当たらないだろ。

「あらあら、四人でおでかけ～？」

準備も整つて、アパートのボロ階段を四人揃つて降りて行くと、下ではいつも通り大家のおばちゃんがさつさとあるのかないのかわからぬゴミを掃いていた。四人揃つて軽く頭を下げる、おばちゃんはふわっと膨らむシャボン玉のような笑顔でこちらに手を振つてくる。

「朝早く四人揃つてびうしたの～？」

「一葉たちの日用品も揃えなきゃと思つてさ。これからアパートでショッピングつて感じ」

「そつか～楽しんできてね～」

妙ちきりんな四人を端から順に見て、溶けるチーズのよつて類を緩めるおばちゃん。

それもその筈、一葉は言わばもがな突出した容姿も涙するような学校の赤いジャージ上下。一葉と二葉は金曜日に買い出しにアパートに行つた時に急遽購入したショートパンツに俺のTシャツ。

俺は一人だけ着飾るのも変なので、黒のパーカーとジーパンで地味に仕上げた。どうみてもこれは「デパートにショッピング」というよりは、徒步2分のコンベニにちょっとくらい買ひ出しへ行つてくるへの装備である。

「おばさん、昨日はお皿にきちんとひらめきを頂いたみたいで・・・、ありがとうございました。」

一葉が深々と頭を下げるのを見て、ここにこのと宿めるおばちゃん。おばちゃんに会うとなぜか毎度頭を下げてこむ一葉がいることが、最近のパターンだ。

「オオヤオオヤ！ 今日は何くれる！？」

「バカタレ！ 図々しそぎだつての！」

相変わらず馴れ馴れしい一葉に戒めのげんこつを落とす一葉。

「いてーーもーヒトハ殴りすぎーバカになつたらどうすんのー？」

「アンタは元からバカでしょ！」

「・・・・・・・・ふふ、ホントにフタバは食いしん坊・・・・・・・・」

「ミジバになつたらびりすんのー？」

「それどういう意味だ！ つていうか言ひ直すな！」

相変わらずがやがやと揉める三姉妹をどうぞと止める俺。

「お、おこおまえら落ち着けって・・・。悪いおばちゃんそんなわけであちよつから行つてくるわ」

「ふふ、気をつけね~」

そう言つておばちゃんから眼を話し、下りの坂道へと歩を進めようとしてみると、

「なんだか家族みたいだな~」

後ろでおばちゃんが何か言つたように聞こえたが、俺が振り向いた時にはおばちゃんはもう掃除の続きを始めていた。

「どうかな?」

俺の前でモデル顔負けのポーズをとり、俺を魅了してくるのは勿論一葉だ。あらかじめ試着の前に15着以上の候補を手に取り、長い時間品定めした後、結局見るだけでは決めきれずに現在8着目に突入中。

ふわっとしたイメージの鮮やかな薄い縁掛かつたワンピースに白いカーディガンを羽織り、頭に茶色のキャスケットを乗せる程度に被つていて。イメージするなら間違えてデパートに舞い降りてしまつた森の妖精だ。

「お、おお・・・めっちゃ似合つてるよ」

「もーハルキさつきからそっぽつかり!」

それは仕方がない。

一葉のその突出した容姿に似合わない服など存在しないのだ。おまけにスタイルも良く、出るところはしつかり出ているので先程からモデルが目の前でポーズをとつてくれてているようになしか見えない。

「他にどう言えつてんだよ」

「そ、それは・・・可愛いとか・・・さ・・・

「え? なんだつて?」

声が小さくて後半が聞こえない。

「な、なんでもない! ハルキはボキャブラリーなすぎなの!」

「そんなこと言つたつてホントに全部似合つてるんだからしそうがないだろ」

これじゃあ決められないじゃん・・・などとブツブツと言いながらまたカーテンを閉める。試着室のカーテンの向こうでは既に9着目に手を掛けているころだろ。あらかじめ一人3着までと言つてあることが、一葉を悩ませている原因だ。

といつも制限しなかつたら全部買つ気だつたんじやないだろ? うな・・・。

恐ろしいことの上ない。

一葉の右隣りの試着室から三葉が恥ずかしそうにカーテンを開く。おさげにしている方の肩が露出していて、そこから中に着込むタンクトップが見える。下は白いフリルの付いた黒いミニスカートを履いて、同じく黒の二ーソックスで合わせている。大人になりたくて背伸びをしているような、なんとも三葉らしいチョイスだ。

—  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
—

「可憐な、ミシバ」

「ほ、ホント・・・！？」

俺の言葉に向日葵が咲くよに表情を明るくする。しかし恥ずかし

יְהוָה עַל־עֲדֹת־יִשְׂרָאֵל

「ねー！ ハルキ助けて！ ひつかかつたひつかかつた！」

ナリテンの向こうで何やら騒ぐ声

卷之三

「ベルトが！ カーテンに！」

「開けるぞ？」

「ふえ、取れた、・・・」  
俺がすぐにとつてやると、ようやく無理な体勢から解放された二葉  
にカーテンが引っ掛けられていて、二葉はお尻を突き出すようななん  
とも間抜けな格好をしていた。また起用な引っ掛け方をしたもんだ。

二葉の格好は、モスグリーンのキャップを斜めに被り、白いカジュアルなデザインのTシャツに、七分丈の足のラインが見えるすらつとしたジーンズを履いている。先程の一人とはまた別な路線で、ボーライッシュかつ可愛いらしい「コーディネイトだ。

「うん、やつぱりフタバも似合つてるな

「ホントか！？へへー」

少し照れるように見せる一葉。

どうやら俺の審査の甲斐あつて三人とも気を良くしたらしく、俺が描写した服をそのまま着ていくことにしたらし。そのほか全員分で計6着を購入し、一葉が「また来ようね」などと言うので苦笑いだけ返しておいた。大多数参加のミスコン審査員を一人でこなすようなものだからな。

その後日用品などを三姉妹に買わせている間に、俺は事前に採寸を済ませておいた一葉の制服を取りに行つた。若干受け取る時の店員の訝しげな表情は気にしないでおく。制服を受け取つて、待ち合わせ場所に行くと、一体何を買えばその袋の量になるんだと言いたくなるような膨らみと量を、自分達では持てずに床に置いて、自動販売機の前で休憩していた。

「・・・おま、ちょ、マジかこれ・・・？」

「えへへ・・・ちょっと買い過ぎちやつた」

語尾に星でも付きそうにお茶目に答える一葉。

遠慮せすなんでも買えと財布の紐は緩めてはいるが、まさかこれほどまでとは・・・。

いやたぶんいくらなんでも最初だけだろ。ついでに、  
そう信じたい。

生活必需品は買い終えて、そろそろデパートを出ようかと出口に向かって歩いていると、明らかに三葉の視線はある一方へと釘付けになつた。その視線の先は、この辺りではかなり上手いと評判のアイスクリーム屋「21 ICE CREAM」がある。

寝言でも呟いていたが、そんなに好きなのか。

三葉のそれは店頭に覗く色とりどりのアイスクリームを溶かしてしまつほどの熱い視線を向けている。

「ミヅバ？」

「へー？・・・・・あ・・・・・

先行く俺達の後ろでアイスクリームとの距離が広がるのを惜しそうに小さい歩幅でついて来る。

「・・・アイス食うか？」

「いいの！？・・・・・あ、いや、フタバが食べたいなら・・・・・可愛いやつめ。

「おーいヒトハフタバ、アイス食つてかねーか？」

「あ、いいね。こここのアイスクリーム美味しいんだよね～」

「おー！アイスアイス！あたしチヨコー！」

「じゃあ私は抹茶かな～」

二人の賛成を聞いてから、三葉に眼を移すと、店頭の冷凍庫を鼻がつく距離で品定めしていた。

「・・・ミツバは何食う？」

「え、えつとえつと！バニラとチョコミントとストロベリー…」

まさかのトリプルですか。

まあ、三葉の面白い様子も見れたし、これはこれでいいか。

注文を済ませ、店員のお姉さんがアイスクリームをコーンに乗せる様子をいつもとは違う爛漫な笑顔で眺めている三葉。トリプル完成品を受けとつて、眼には無数の星が流れている。

「ミツバ上手いか？」

「うんおいひー！・・・・・・・・・じゃなくて、おいしー・・・・・・・

少し控えめに気持ちを抑え、三葉はコクリと頷いた。頬を朱色に塗つて、それでも幸せそうな表情を隠しきれない三葉に、ついつい俺も頬を緩めせずにはいられない。アイスクリームでこんなに喜んでもらえるならいつでも買ってあげたい。

そんな親バカチックな事を考えながら、俺達はデパートを後にした。

四人で歩いていると、美人三姉妹への視線がすごい。

先程まではお粗末な服装でカモフラージュされていたが、オシャレ

にコーディネイトした途端に覚醒した。まあ一葉達が注目されのはいいが、俺の居場所がどんどん狭まってきて息苦しい。なんというか場違い感が半端ない。

先程までは勝っていたパークー＆ジーパンも、一葉たちが変身した今となつては下剋上である。それに加えて溢れんばかりの笑顔でアイスクリームを美味しそうに食べているのだ。何かのプロモーションビデオの撮影か何かと勘違いされても不思議ではない。

「ねえハルキ？あれってドラマの撮影じゃない？」

「え！？ヒトハお前ホントに芸能界デビューしたの！？」

「は？何言つてるの、あれよあれ

「あれ？」

一葉が指示示す先では、大勢の人だかりと大きなテレビカメラやら大型マイクやらが、デパートの駐車場で撮影を行つていて。危ない危ない、心の中で思つていることが言葉に出てしまつた。それにしても人が多い。野次馬かと思ったが、どうやらエキストラのようだ。計30人ほどが、監督とおぼしきサングラスを掛けたおじさんに指示を受けている。

「ちょっと見に行つてみない？」

「いいけど・・・、フタバもミジバもいいか？」

「見たい見たい！ドラマ！」

「・・・、ちょっと興味あるかも・・・」

全員可決で、少々の野次馬根性で撮影の輪へと近付いていく。これ以上は近寄れないという血の所まで近付いて中の様子を見てみる。

『はい！カット！オッケーでーす！』

その場にいる全員に響き渡るほどの声量が響き渡ると、周りはお疲れなどと撤収の準備に取り掛かり始めたようだ。

「なんだ～終わっちゃったのか～」

一葉が残念そうに口を尖らせてから、最後の一 口のローンを口に入れる。

「ま、しょうがないから帰るか

「そだね」

では我が家へ・・・そう思つた時だつた。

ふと振り向くと、ぱつたりといつ言葉がこれほど即ち嵌まる瞬間はないだらう。

クラスメートの花咲嘉穂がそれはもう田撃してしまつたと言わんばかりの眼をこちらに向けていた。

「碧原さんに・・・草野くん？」

花咲は俺達を呼ぶ声とは裏腹に、視線は少し下、要するに「一葉と三葉へと向いている。

何か嫌な予感がするな。

無駄に俺達の髪色が同じなために、その一葉と三葉を訝る視線はまるで・・・

「あ、あなたたち・・・結婚していたの・・・！」？

「つて、飛躍しすぎだろ！？」

せいぜい兄妹ぐらいかと思つたけど、想像を遙かに越えた勘違いしちやつたよこの人！

「こんにちはー！ほらミシバ！知り合いらしき人に会つたらアイサツ！」

こういう面はとてもしつかりしている一葉が先に頭を下げて、三葉にも挨拶を促す。

「・・・こ、こんにちは・・・」

少し控えめに挨拶をして、すぐに俺の後ろへと隠れてしまつ。今だけは俺の後ろに隠れてほしくない。

「あ、・・・こ、こんにちは・・・つて！そ、そうじやなくて！高校生で既に一人の子持ちだなんて、あなたたち絶対おかしいわ！」

「人聞きの悪い事を大声で言つんじゃない！？」

この前知つたクールな面はどこかに置き忘れてきたよう、「元ひどく慌てふためいている。なんとなく感じてはいたが、かなり天然だろこの人。

「違うのよ、花咲さん！ 一葉と二葉は私の妹なの！」

「い、妹……？ ぐ、草野くん！ 二姉妹全員を手ごめに……？」

「アンタは俺をどういう目で見てるんだ！？」

「これじゃあ埒があかない。

妄想が常人の遙か上へ行つてしまつて、このお方に、俺はあれやこれやと碧原三姉妹との関係性について、事細かに同居生活がばれない程度に説明してあげた。

「…………ふーん、なるほどね、それで碧原さんを助けて家族ぐるみのお付き合いをしてるつてわけね」

「この間もそう言つたろ…………」

なんだか最近言い訳ばかりが上手くなつて、気がするな……。しかしさばれて一葉たちの住み処がなくなるのは困る。ここは譲れない。

花咲はまだいまいち納得していな、よう、な顔で腕を組ながらジーフと俺達をすがめ見ている。

「…………まあ、いいわ。」めんねおじやましちやつて。私そりそろ次の撮影先に行かなきゃならないから

「撮影先？」

「そ、私エキストラだけど、今放送しててる深夜ドラマに出演してるのはよ

「マジで！？ 台詞とかあるのか？」

「一般市民だからなしよ」

これは驚いた。

なんでも、将来は女優として仕事をするのが夢であり、現在学校の合間を縫つてエキストラとして勉強中であるらしいのだ。

「ジヨゴーさんなのか！ サインくれ！ サイン！」

もう既に敬語を捨てて、一葉は、先程のアイスクリームのコーンに巻き付けられていた紙を差し出しながらサインをねだる。

一葉それはちょっと酷いぞ。

隣では三葉がボーッとしながら花咲の表情を見つめている。たぶん、

化粧と衣装で大人な雰囲気をこれでもかと出していいる花咲に見とれているのだろう。

「すごいな、花咲さん。もう将来に向けて動き出してるんだ……」

「そんな事……ないわよ……」

一葉の素直な感嘆の声に、微かに頬を染める花咲。一葉の言う通り、本当にすごいと思う。俺なんか将来の事なんて、今の今まで考えてこともなかつた。ただ普通に大学へ行つて、ただ普通に会社に入つて、その途中でほんの少しの幸せを得られればそれでいい。そのくらいしか考えていなかつたから、花咲の行動力と現実に目を向けるひたむきさは、すごく尊敬できる。

「ごめん、もう行かなきや」

「うんまた学校で、花咲さん」

「……あなたたち、あんまり堂々と行動してるとそのままばれるわよ」

そう捨て台詞を残して、花咲はエキストラが乗り込んでいると思われるバスに向かつて走り出した。

も、もしかしてばれてる……？

少し悪戯に笑みを零して行つた彼女の表情は、そうとしか思えない。まあばれてるにも程度はあるが……。

ちょうどそのバスに乗り込み際、花咲はこちらに振り向いて、

「力亦でいいからー！」

と一葉に向けて大きく手を振つていた。

「よかつたじゃん」

「へへへ～！」

隣で驚き眼を見開く一葉に肘でちょいとこづいてやると、大層嬉しそうに白い整つた歯を見せた。

休み明けて月曜日。

どうにも休日の後の学校つていうのは体を重くさせるようで、睡魔との闘いを終えた休み時間ともなれば机に突つ伏せざるを得ない。一応授業は眞面目に聞いているため、貴重な10分間を無駄に過ごすわけにはいかないのだ。

だが至福のスリーピングタイムを妨害してきたのは、眠気の一つも見当たらないミネラルウォーターのような笑顔でやつてきた佐久間だ。

佐久間は俺の前の不在の席に腰掛ける。

「なあハルキ」

「・・・・・」

「起きてるだろ?」

「寝てるよ」

バレバlena嘘をついて、観念して顔をあげる。

「碧原・・・最近笑顔増えたよな」

「ん?ヒトハ?ああそうだな、花咲とも友達になつたみたいだしなあ」

最近で。同じクラスになつてまだ一日しか経つてないぞ。

「ホント、筑紫じゃないけど何したんだ?」

佐久間はいつものにこやかは自分の席に置いてきたように、真剣な顔で問い合わせてくる。

一葉が笑つてる事や友達作つている事がそんなに珍しいのか?それとも俺が女の子と友達になつたことが珍しいのか?つてやかましいわ!

「別に何も・・・まあ俺も仲良くなつたのは確かだけどよ

「だからどうして仲良くなれたんだ?」

机に手をついてずいと顔を近付けてくる佐久間。

妙に食いつくな・・・?

「・・・・・お前・・・ヒトハと仲良くなりたいの?」

俺が核心を突いてやると、近付けていた顔がまるまるつむじで赤く染め上がりしていく。

「いやー！ そういうわけじゃなくてな！ ただほらー同じクラスだし、やっぱり仲良くなつておかないとだな！ 今後学校活動において

「

その後もなんか言つていたが割愛。

要するにどうやら佐久間は一葉と友達になりたいらしい。思えば佐久間もモテるはモテるんだが、友達と言えるほどの女の子つていなによな。だいたいが佐久間のファンつて感じで対等じゃないからな。

「いいんじゃね？ ヒトハも友達増やしたいって言つてたし、あいつ喜ぶぞ」

「そ、そつか？」

「今話かけてくれば？ そこで三人で話してるじやん」

俺が指す先では一葉と葵と花咲が楽しそうに談笑している。

「いや、無理だ俺には」

どの口が言つ。こつもこつやかに女の子に手振つてあげるように行けばいいだろ？

「あ、慢じやないが俺は自分から女の子に話しかけたことはないぞ！ 自慢じやねえか！ 自分から話しかけなくとも向こうから寄つてくるつてか！」

殿様かお前は！ ぐるしゅーないつてか！

「だからハルキに頼んでるんだ！ あの輪に一緒に行つてくれるだけすんつと胸を張つている佐久間を睨んでから、俺はもう一度机に突つ伏す。

「だからハルキに頼んでるんだ！ あの輪に一緒に行つてくれるだけでいいから！」

今までに経験のないすごい力で肩を揺すつてくれる。

ちょ、痛い痛い！

「わーっかつたよ！ 行くよ！ 行けばいいんだろ！」

くつそー俺の貴重な休み時間が・・・。

俺はもうやけくそになつて、佐久間を伴つて談笑の輪に向かつて行

く。

「おーいヒトハ～」

「あ、ハルキ寝てたんじやないの？」

話し笑顔そのままに「ちらへ振り向く一葉。

・・・このままじゃ三年寝太郎なんてあだ名を付けられかねんな。

「いや～佐久間がさあ・・・」

「みんなアドレス交換しないか！せっかく同じクラスになつたこと  
だし！」

俺が説明する前に、声高々に自分の携帯を掲げる佐久間。  
全然普通に話しかけてるじゃんか。まあちよつと声が裏返つてている  
気がするが。

まあ最初にアドレス交換を出したのはいい作戦だな。

「お～お～！サンセーサンセー！アド交換は友達の証だ～！」

葵が嬉しそうに自分の携帯をいじり始める。花咲も満更じゃないなさそうに何も言わずとも携帯をブレザーのポケットから取り出す。  
まあこの流れの手前俺も携帯を取り出さない訳にはいかないだろう。  
メールとか面倒だからあんまり好きじゃないんだけどな。

「ナニナニ？なんの話してーんの？」

筑紫も集まりを嗅ぎ付けて、もつそろそろ暑苦しいマフラーを揺らしながらやつてきた。

「みんなでアド交換しようって話しだよ！」

葵が元気よく答えて、「あたしは準備オーケーだよ～！」とテンションマックスである。

筑紫も「俺も俺も～！」と相変わらずのキャラクターを醸し出している。  
と、その横で一人俯いている奴がいる。誰であろう一葉だ。

「ヒ、ヒトハ～した？」

俺が尋ねると、一葉は涙目を俺に向かながら、

「・・・持つてない」

「へ？」

「私携帯持つてないよ～！」

泣きついてきた。

「あれ？ヒトハ縁のケータイビラしたんだい？」  
葵が不思議そうに一葉の表情を伺つ。

前は持つていて今現在ない・・・つて」とは、

「携帯火事で

「おつとおおおおーそだそだーヒトハは家に忘れてきたつてさ  
つき俺に言つてたじやんかー！」

火事の事をあつさり言おうとするんじやないー？

また色々とやらしくなるからー！

俺は半ば強引に一葉の首に腕を回して口を塞ながら抱き寄せる。

（携帯あとで買い行くぞ）

そして一葉の耳元で囁いてみると、顔をアマーテのよつてに真つ赤に染  
めながらうんと頷く。

やべ、ちょっと焦つてきつと絞めすぎたか。

俺が謝つて解放してやると、息を荒げながらそれでも何かを言つた  
げに呼吸を整えようとしている。

「ど、とこうわけで、アドレス交換は明日！こい！？」  
ここぞとばかりにお嬢に戻つて、ビシッと人差し指を俺達に向けて  
拙い足取りで教室から去つて行った。ていうかどこに行くんだ、も  
う授業始まるぞ。

なんというかだんだんわかつてきただが、慌てるとお嬢に戻るんだな。

「な、なあハルキ・・・  
「ん？」

佐久間が両手に携帯を持ちながら目を向ける。

「俺・・・なんか悪い事したかな？」  
ある意味な。

でも俺は答えないでいてやつた。

あれから一葉と放課後に携帯を買いに行くも、以前と同じ携帯じゃないと怪しまれるのではという事で、前の縁の携帯を探しにショッピングモールハナオカへ赴いた。しかしハナオカでは目的の物は見つからず、わざわざ電車を乗り継いで花岡町よりも栄えている隣町まで行くこととなつた。3軒目にしてようやく同じデザインを見つけ、帰つてきたのが21時過ぎ。流石に腹を空かせた一葉と二葉に叱られてしまつた。放課後すぐに向かつたのにものす」い時間が掛かるあたりやつぱり田舎だなあとしみじみ思う。まあ俺は都会の「みじみした所よつよつぼぢい」と思つけどな。

そして火曜日の放課後。

昨日買い溜めも済ませていつもの買い出しもないため、帰つてくるとさつやとラフな格好に着替えて夕飯の用意までだらだらと過ごし始める。一葉と二葉は夕方のアニメに食い入るようになつてゐる。俺は休日の親父のように、横向きに寝転がり手の平を枕にしながら週刊誌を読み耽る。そして一葉はといつと・・・、「えへへへへ〜」

何やら購入した携帯を四方八方から眺めながら、気持ち悪い声を發し嬉しそうにしていた。顔の整いすぎるパートも福笑いのようになズレさせて、畳に座布団を一枚敷きごろ寝しながら悶えている。本当に携帯を持っていたのか些か怪しいところだ。なんか新しい玩具を買って貰えた子供みたいになつてるぞ。

「はつーそうだ！」

何かを思い出したように、携帯が入つていた箱を漁る。取り出したのは説明書だ。

「メールメールっと・・・」

どうやらメール送受信の操作方法を調べているようだが・・・・・・

知らないのかよ！？前の携帯で葵に送ったことないのか？

どうやら初メールを送ることに成功したらしい。嬉々として鼻歌を交えながら敷いた座布団からも外れ、ごろごろと畳を転がっている。すっかりうちの生活にも慣れたらしい。メールはきっと今日学校で五人とアド交換した誰かに送ったのだろう。本命葵、対抗花咲、大穴で佐久間つてとこだな。筑紫は・・・うん。

תְּנַשְּׁאָרָה

俺の初期設定から変えていたし着信音が鳴り出した

あれ 僕にもノーリカ……と三セ筑紫辺りがイタスラノーリしてきたんだる。俺は食卓テーブルに発哺つてあつた携帯に手を伸ばす。

『差出人：一葉 タイトル：やつほー（^〇^）／ 本文・きょう  
のゆうはんなにがいい（？—？）』

俺ここにいたにいるよー?」

思わず立ち上がりてしまう。1メートルも離れてない距離でメールとか斬新だな！もはや送受信する電波が勿体ない。

17° N 17° S

ハリキ届いた！」

「自分が送ったメールを人のケータイで自分で見てどうする！？」

俺のツツイートも届かず、一葉は更に自分の携帯のアドレス帳を一生の幸せ分の笑顔で俺に見せ付けてくる。溢れんばかりっても五人だけだ。

まあ一葉が大層喜んでいるのでいいか。  
「飯は任せるよ。材料たくさんあるし」

「うん、おっけー！」

夕方なのに眩しい笑顔でグッズサインを出すと、「よーし、今度は一斉送信をやってみよー」などとまた説明書を読みはじめた。

。。。。

少し経つとまた俺の携帯が音をたてる。

『差出人：佐久間恵介 タイトル：事件だ 本文：碧原から「碧原です！」というメールがきました！…どうする？』

RPGの戦闘シーンのようなメールをよこしたのは佐久間だ。事件つて大袈裟な。お前は一体この事件になんて名称をつける気なんだ。どうするも何も・・・「佐久間です！」って返しておけばいいんじやなかろうか。

俺はそのままを一言で返信してやった。すると1分も掛からずにメールが帰ってきた。

『差出人：佐久間恵介 タイトル：佐久間です！ 本文：つてハルキが返しておいてくれ』

俺は草野です！どこの世界に自己紹介を他人に押し付ける奴がいるんだ。しかもメールで。やはりどこか抜けている奴である。あいつ最近一葉と関わってからおかしくなってるぞ。

佐久間のアホメールは無かつたことにしてそのまま閉じて、俺は再び雑誌に目を向けようとするが、またまた俺の携帯は無機質な着信音を響かせる。

「今度はなんだ・・・？」

こんなにメール来るのは初めてだな。だんだん面倒臭くなってきたぞ。

『差出人：枝村葵 タイトル：しくしく（／＼：） 本文・最近ス  
ーパーきてくれないね（くーく）もしかしてハナオカに浮気しちや  
つたのかな？？？？って店長が泣いてたよっ！』

葵からだった。というかどんだけ寄いなんだよ。まあ店長とは顔  
馴染みだし常連だった俺がしばらく顔出さないと売上もだい  
ぶ削られている事だろう。

現在5時。一葉と三葉はいつの間にか夕飯の支度を始めたようだし、  
二葉は連続でやっている次のアニメを見ている。ちなみに夕飯を用  
意を手伝わない一葉は朝の「ミ出しと風呂洗い」という専用の持ち場  
がある。

どうせ暇であるし、ちょっとくら顔出ししてくるのも悪くないか。ま  
あ何も買わないんだけど。

なんとなく重い体を無理矢理起こして、一葉達が調理している台所  
を通り玄関に向かう。

「ヒトハ、ちょっと出でてくるわ～

「どこ行くの？」

スーパー南田つて言うのも変だな。

「散歩だ」

「・・・ハルキ散歩好きだよね」

「・・・なんだよ？」

「なんか徘徊してるおじいさんみたい」

「ほつとけ！」

一葉は可笑しそうにクスクスと喉を鳴らす。

「ふふ、門限7時だよ」

「りょーかい」

一葉に告げて、俺は適当にジャケットを羽織つて家を出た。

太陽はリフレッシュタイムに入る寸前で、もつすつかり夜という感  
じだ。俺はマイ自転車を一階のアパート住人兼用倉庫から引きずり

出してサドルに跨がる。よく考えてみれば「葉たちがきてから」の自転車にも乗つていなかつた。

「さみしかつたか？」

試しに聞いてみても相変わらず壊れそうな音しか出してはくれなかつた。

暗い坂道を慎重に降りて、木造建築の薄気味悪い学校前を通り過ぎ、後はだんだん街灯も増えて直線を突き進むだけ。久しぶりに降り立つたスーパー南田の駐車場は相変わらず1、2台しか停まつていな。俺は自転車を一台も停まつていない駐輪場に停めて、スーパー南田の自動ドアをくぐつた。

「・・・しゃいませ〜」

相変わらず買い物籠の整理をしているチャラいお姉さんが今にも寝てしまいそうな表情で慣用句を読み上げる。入つて早々こんな店員がいたらそりや客も回れ右だろつ。俺は愛想の悪い店員を一瞥してから、直ぐにレジへと向かつた。確かこの時間は店長もレジにいるはずだ。

「お〜！ハルくんじゃあないかつ！あたしのラブコールが実を結んだようだねつ！」

レジに向かう前に葵と遭遇した。葵は相変わらず制服姿に極太南田エプロン姿だ。きっと学校から直行で来ているのだろう。どうやら床を拭いているようだ、モップを片手に立てる姿はさながら如意棒を握る孫悟空のようだ。

「ラブコールつて。あ、店長いる？久しぶりに挨拶しこいつと思つてさ

「店長ならあつこで死んでるよつ！」

葵は死人を指す時のテンションではないテンションで死んでいるといふ店長を指差す。その先には生氣を抜かれたミイラのように、レジの台上に頭だけ乗せてぐーたれている店長の姿があった。

「て、店長っつす・・・・・

声かけづれー！

近付くとそこはお化け屋敷なのではと錯覚するような空氣だ。

店長は俺の声に反応して壊れかけのブリキの玩具のよつこ顔をあげる。

「お・・・・お・・・・・・・・おおおおおおおおー草野くん！帰つてくれたのか！」

まるで裏切つた仲間が戻つてきてくれたかのよつこ田に光が戻る店長。

「君が最近来てくれないから、店の売上がさっぱりだつたんだよ！いやあ～助かった！！生き返つたよ！」

店の売上問題を俺に一任されても、これはまちゅくちゅく買つてあげないと店長過労死しそうだな。あ、働いてないから過労死はないか。でも店長今日は買いにきたんじゃなくて、久々に挨拶しようとした。

・  
と俺が零すと同時に再び頭を垂れる店長。どよんとした黒い靄が背中に見えるようだ。

「スンマセン！ここには新鮮な野菜や魚もたくさん入るし、惣菜も総じて美味だから来たいのは山々なんんですけど、色々理由が重なつてここにはなかなか顔出せないんす！」

「はは、わかつてゐよ草野くん・・・・・・・。君もお年頃だ。こんなクソみたいなスーパーなんかより、田の前のビッグでクールなシヨッピングモールで女の子なんかときやつきやうふふしたいもんな・

・・・・・」

あながち間違つてないから反論できない。あまりに俺の最近の行動を的確に当てるので俺は苦笑いするしかない。まさか店長見てたんじやないだろうな。店長は死んだ魚のような遠い目で外に見え

るハナオ力を眺めている。

店長は見た目も実際も30代。未婚。背がとても高く190センチ以上はあるだろうが、現在はかなり小さく見える。人通りがよくとても愛想がいい。かなりの量のあごひげは人の良さを一層醸し出していく、太つていたらサンタクロースになれるだろつといつ風貌である。

「ハルくんハルくん、もうバイト終わるから一緒に帰るうつよー！」  
店長に憐れみの苦笑いを送つてると、葵が右手をあげて宣言するよつに言つ。

「お、おお。んじゃまた外で待つてるよ」

「おっけーーーおーしラストスパートだあー！」

葵は嬉しそうに最後の仕事を終わらせに向かつた。

「・・・うん、そうだ、それがいいよ。はいこれ、ハナオカのカフエ半額券。存分に使つてくれて構わないよ・・・。若いモンは若いモン同士で、適材適所があるんだよ・・・」

「あ、あざつす・・・」

店長は後ろに疫病神でも付いているかのような表情で、ハナオカの半額券を差し出す。アンタこれハナオカで買い物しないと貰えない奴じやん。店長絶対ハナオカ結構行つてるでしょ。

俺は店長の好意（皮肉か？）を仕方なく受けとつて、入口前で葵を待つことにした。

待つこと5分。葵がエプロンを剥ぎ取つて「おーまーたーせー！」などと叫びながら跳ねるようなステップでこちらに向かつてくる。

「お疲れ、ほらよ」

俺は労いの言葉を掛けて、買つておいたコーヒーを差し出す。

「わたしにかい？」

葵は驚いたように「コーヒーを見つめる。

「あ、コーヒーダメだつた？」

「う、ううん！ ありがとー！」

くすぐつたそにはにかんで、コーヒーを受け取る葵。頬を赤らめて笑う葵に思わずドキリさせられる。

俺達はまた一、二、三のよに、俺は電車をひきながら、葵に徒步で進み出す。

ノリタケノコ

h  
?

葵は何かを言いかけて、少し躊躇うよう俯く。

「どうした？」

۱۱

葵はちらりちらりと上田遣いで「からを伺つて」いる。

「相談でもなんでも話せよ。友達だろ？俺ら

前に葵と産田帰りに宣言されたものを引き出す

卷之二

「え？」

藏書  
中華書局影印  
新編  
卷之三

てそんな感じではあるし、葵にも筒抜けなんじゃないだろ？

「なんこいか…………一葉と…………やれやれの

「ブツ！」

思わずコーヒー吹いちまつた。

「ちよい！ ハルくん大丈夫！？」

「はか

コーヒーが気管に入つてつい口が滑つてしまつた。

何やら葵が呟いた気がしたが、俺の耳には入ってこない。

というか、そもそも何故隠さなければならないんだ？よく考えてみれば学校に公にならなければ友達くらいになら話しても大丈夫な気

がするけど……。

葵は、むせた俺の背中を優しくさすってくれている。

「ん~なんつうかな……」

「い、いいんだよー友達同士でだつて隠し事はあるしつー……  
・でもね、」

明るく振る舞う葵の表情は自嘲するように苦笑いに変化する。

「辛いことがあつたのに、相談してもうえなかつたつていうのは……  
・ちょっと堪えたかなつ！へへ……」

ぼけつと下でぶら下げている学校鞄を蹴飛ばす。

葵が言うのは一葉が溺れたつてことになつていて件についてだらう。俺はその件に關心していることになつていて、最近の一葉の様子から大体察していたのかもしれない。

「そうーきつとこれは嫉妬なんだよつー……なんだかさ、最近一葉を取られちやつたみたいに感じるんだよ……」

俯きながら感情を道路に吐き捨てるように話す。心なしか歩くスピードも緩めている気がする。

「あたしさ、一葉にはたくさんたくさん感謝してるんだよね」

「えじやないか

葵は俺の言葉に足を止める。

「ちがうよ、ちがう、ちがうんだ。そつじやないんだよ」

そして、雑念を振り払つように頭を振る。掌を負の感情を包むように握る。

スチール缶を持つ手も震えている。

「……何がちがうんだ？」

俺は平淡に問う。

葵は答えないで、ただ俯いている。下の道路に答えを探すよつ。

「……うん、秘密だよ、これは」

「それじや、堂々巡りだな」

ひたすら考え抜いて出した答えはシークレットだった。

「へへ、ごめんね。でも、これだけは言わせて……」

葵はそう零すと、よつやく垂れ下がっていた顔をあげ、

「一葉のピンチを独り占めしないで欲しい。気づいてるのに助けられないのは……辛いんだよ」

暗い背景にも咲かせるその花は、とても弱々しく儂いものだった。鈍感な俺にも葵のいつもの、俺の知っている葵の笑顔じやない事はすぐにわかった。葵の話からは葵が抱いている一葉へのただならぬ想いは見えない。ただ葵も一葉の幸せを願っている。心から。それは痛いほどに伝わってきた。

でも俺はすぐに答えを告げることができなかつた。一葉との共同生活のこと、一葉が火事被害に遭つたこと、その他ここ一週間のことそとした行動のこと。総ては俺も一葉の、そして一葉と二葉が楽しく豊かに幸せに暮らせればいいと思つてているからの行動だからだ。俺にとつても一葉達に関して、あの日から人事ではなくなつたから。そう思つてた。

でも、違うのかもしれない。

同級生の、しかも男子生徒の元での同居なんて、一葉にとつて本当に幸せなことではない。こそそと世間に公になるのを恐れて友達にも嘘をつき続ける毎日なんて息苦しいだけだ。

葵に総ての事情を説明して、一葉たちを匿つてもらえばいい、そう思つた。それで総て上手くいく。俺の脳はそう指令を下した。はずだつた。

しかし俺の気持ちは声となつて出ない。喉をコルクの栓で蓋をするように、声にするのを何かが拒んでいた。胸のうちに渦巻くもやもやとした気持ちがさらに追い討ちをかける。

「あはは、まあそんなに考え込まないでつー気が向いたらでいいから教えてね！」

様子のおかしい俺に気を遣うように、会話を切る葵。

気付けば別れの交差点に差し掛かっていて、葵はコーヒーのお礼を

置いて、素早い猫のように暗闇と人込みに消えていった。

「はは・・・なんだうな」

俺は誰に問うでもなくひとりごちて、自転車に跨がった。

誰も答えてはくれない。

自分にもわからない。

「ただいま・・・」

「あ、お帰り～。もうそろそろ夕飯できるよ」

我が家と外を繋ぐドアを開くと、食欲をそそる匂いが俺の鼻と胃袋をくすぐる。一葉はお味噌汁用のお玉を持ち上げて、可愛いらしく出迎えてくれた。一週間前には有り得もしなかつた光景だ。そして三葉はとこうと、何やら真剣そうにフライパンと睨めっこしている。

「・・・・・・よし・・・・・！あ、ハルキおかえり・・・・・」

どうやらオムライスを作っていたようで、綺麗な橢円で鮮やかな黄色で包まれていた。

包むのに成功すると三葉もこちらに顔を向け、オムライス同様鮮やかな、それでいて控えめな笑顔をくれる。

「ん、ただいま・・・」

「・・・・・・あれ？なんか元気ない？」

「え、あ、そんなことないぞ！」

我ながら芝居の才能はない。俺はボディビルダーのように腕をあげて空元気を見せる。

「あ、もしかして卵半熟の方がよかつた？」

「え、ああ、いや・・・・・」

どしどしつかずの曖昧な答えに少し首を傾げる一葉。

「半熟は私も三葉も作るの苦手でや～。失敗して中途半端になるの

もヤだつたから普通のにしちやつた

べろつと舌を出して悪戯に笑う。

「 半熟なら俺作れるけど・・・今度作ろつか? 」

「 ホント! ? じゃあじゃあ! 半熟卵にハツシユドビーフかけたやつがいい! 前に一度だけ三人で食べに行つた事あつて、すげく美味しかつたの! 」

「 レストラン級までにはいかないけどな

一葉は最高潮に嬉しそうに、先ほど三葉が巻き上げたオムライスに温野菜を添えている。

今度作るうか?

きっと作る機会はもうないだろつ。そしてこのわいわいがやがやとした夕食の団欒もなくなるだろつし、夕食後の語らいの一時もなくなるだろつ。

でもそれでいいのだ。最初からこの生活には無理があつたんだ。一葉も次の所が決まるまでと言つていたし、葵にお願いすれば断るわけがないのだ。

そう、俺はそれまでの代理。

今日で俺の役目はおしまい。

和室のテーブルには豪勢な温野菜添えオムライス、中央には取り分けのサラダ、コンソメスープのおまけつき。彼女たちのとびっきり特製料理も食い納めだ。

この時間ぐらいは深く味わつてもいいよな?

「 おつしゃーー! つまそーー! 食! つぞーー! 」

「 ハルキ急に元気になつたね 」

「 こんな上手そうなもん田の前にして元気ない奴がいたら、俺が張つ倒しちまうぜー! 」

俺の言葉に三葉は頬を染める。

『 いただきます！――』

### 第3章 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6293y/>

---

クローバー

2011年11月30日21時23分発行